京都歴史災害研究　第７号（2007）１～24

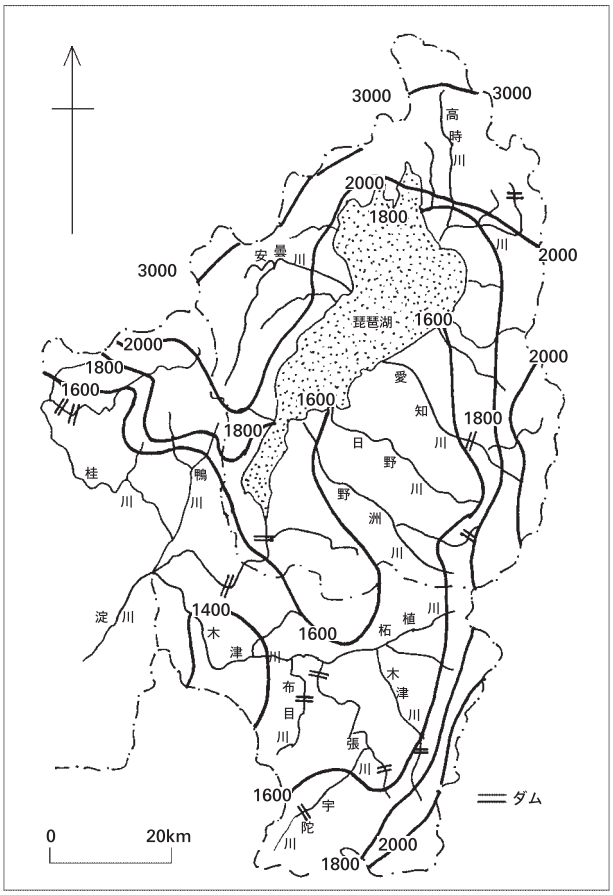
論　　文

木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史

植村　善博*・小林　善仁**・木村　大輔**・進藤　美奈**・山中　健太**・
浅子　里絵**・杉山　純平**・三宅　智志**・山下　博史**

Ⅰ．はじめに

山城盆地の二大河川である木津川、宇治川は歴史的に水害を頻発してきた。また、地形や河川に対する人為的改変や改修事業が繰り返し実施されてきたこと、時代と共に地形の特徴や水害のパターンが変化してきた点で極めて特徴的である。また、今後の異常豪雨などによって水害が発生する確率は高い。本研究の目的は 1）両河川低地の地形を洪水氾濫現象と関連させてその特色と形成過程を明らかにすること、2）過去約400年間の水害履歴に関する史料を整理し、水害の地域ごとの発生状況と上～下流域という水文環境を考慮した水害の広域的特性を把握すること、の２点である。本論は2006年度佛教大学大学院日本史学専攻の科目『地誌学』における水害環境および水害資史料の分析結果である。とくに、自治体ごとに水害年表と年代別頻度グラフを作成した院生諸君の報告を整理したものである。これらの内容は中間段階のものであるが、水害資料を提供すること、地理学・歴史学・河川工学など災害科学の関係者や地域の防災担当者などのご教示をえて今後の研究に資することを目的に公表することにした。ご意見・ご教示を切にお願いしたい。



第１図　　淀川水系と年降水量（mm）の分布

Ⅱ．木津川・宇治川の水理特性と治水事業

１　水理特性

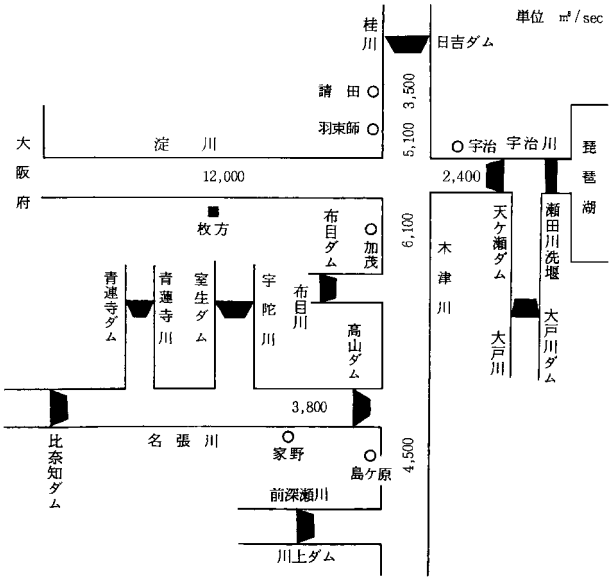
木津川は流域面積1596 km²、源流域の三重県高見、室生山地から北流、上野盆地付近で柘植川、名張川、布目川を合流し、木津川断層沿いに峡谷を西流する。京都府木津で山城盆地に入り、大きく折れ曲がって北流し八幡市で宇治川と合流する（第１図）。木津から八幡の三川合流点までの流路延長は約30 km、平均勾配0. 66/1000である。谷口の木津に小扇状地を形成するのみで、砂質の自然堤防帯を展開している。城陽市富野と京田辺市大住の間で流路が鍵型に屈曲する部分が存在し、これを境に上・下流で地形の特徴や氾濫特性を異にする。すなわち、上流側では幅約２～３km の狭い谷底平野をなし、天井川化した多くの支流が東西両側から合流してくる。下流側では平野幅が４～６km に広がり、支流も本川と平行して北へ流れるものが多い。宇治川は琵琶湖水系の流域面積 3838 km² と本川の流域面積 506 km² とを合わせ4344 km² の広大な流域を有する。琵琶湖は南端の瀬田川から排水され、途中で大戸川や信楽川、田原川などを合わせた宇治川は醍醐山地を穿入蛇行により横断して山城盆地へ達する。谷口から左岸側に延長 2 km 程度の扇状

＊　佛教大学文学部人文学科
＊＊佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻

地を形成しており、その勾配は 3.2/1000 である。宇治から八幡までは伏見を中心にくの字状の折れ曲りを示す。この間の流路長は約 14 km、平均勾配は 0.57/1000 で木津川より少し緩い。

2　改修事業の概要

木津川の治水工事は寛永年間に国役堤が構築され、江戸期を通じて幕府によって修築、管理が続けられてきた。宇治川は秀吉による土木事業として 1594（文禄 3）年に左岸槙島堤を設けて流路を伏見へ迂回させ、その下流では右岸に築堤して淀へ通じる水路を確保した。幕府は 1660（万治 3）年山城大和伊賀三国に山林保護と植林を命じ、1666（寛文 6）年には『山川掟』を発布して治山治水に取り組んでいる。しかし、両河川の河床上昇が進んで天井川化し、水害は止むことがなかった[1,2]。江戸後期には下流部で水害が頻発するようになったため、明治元～ 3 年に木津川最下流部を八幡へ付け替え、合流部の河床高度を引下げる工事を実施した。これ以後、淀川水系の治水計画の一環として改修計画工事が繰り返し実施された。重要なものとして、淀川改良工事により明治 33 ～ 36 年に宇治川の淀南方への付替え、明治 39 年南郷洗堰の建設、大正 14 ～昭和 5 年の三川合流部の引下げと背割堤による分離工事、さらに、淀川改修増補工事として昭和 5 年から木津川堤の改修が実施されてきた。しかし、その後も水害が頻発した。とくに、昭和 28 年 8 月と 9 月の大水害発生をうけ、新たな基本高水流量にもとづく淀川水系改修基本計画が立てられ、観月橋より上流の宇治川堤の本格的な改修がはじめて実施に移された。また、宇治川に天ヶ瀬ダム、木津川水系には高山ダムをはじめ布目、室生、青蓮寺、比奈知などのダムが続々と建設された[1]。その結果、両河川の水理環境は大きく変化した。第 2 図に最近の計画高水流量を示す[2]。木津川下流で 6100 m³/s、宇治川の下流で 2400 m³/s、これに桂川の 5100 m³/s が合流する。なお、大正 8 年に本地域に淀川・木津川水害予防組合（現水防事務組合）が設立され、今日まで活動を続けている[3,4]。



第 2 図　淀川水系の計画高水流量図
（淀川工事事務所淀川管内図（2000）による）

Ⅲ. 木津川・宇治川低地の地形分類

木津川・宇治川が涵養する山城盆地の地形や発達過程については谷岡[5]、日下[6]、中塚[7]、池田・植村[8]、大矢[9]、大矢・久保[10] などによる報告がある。今回、1946 年および 1961 年撮影の縮尺約 1 万分の 1 空中写真を判読し、2.5 万分の 1 地形図に結果を記入した。第 3 図はそれを簡略化した地形分類図である。地形の概略は上記の報告類に譲り、以下では洪水氾濫に関連する地形として、砂礫堆と堤内池沼について検討したい。

1　砂礫堆地形

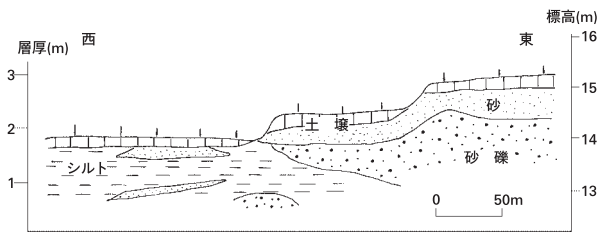
本低地には自然堤防の発達が著しく、河道には交互砂礫堆が発達している。木津川低地に分布する塊状の微高地を検討した結果、以下の理由から単純に自然堤防に一括すべきではないと判断した。①低地面と明瞭に境され、横断面形がかまぼこ状に盛り上がっていること、②平面形が直線的で明瞭な方向性をもつこと、③分布が流路の屈曲部などの水衝部に集中し、床掘れによる凹地を伴うことが多いこと、④砂礫または礫まじり粗砂が主要構成物であること。第 4 図は京田辺市大住北方の微高地西半部の東西断面である[11]。これは周辺の後背湿地より約 1 m の比高をもち、厚さ約 2 m の砂礫層と砂層から構成されている。これらの特徴から、微高地は流送土砂量の多い洪水流により急激に堆積した砂礫堆の一種で、シュートバー（chute bar）やクレバススプレー（crevasse splay）にあたる。大矢・久保の破堤地形とする考え[10] と同意見であるが、広域的分布からみた平面的形態と島畑の特色により砂礫堆を A、B、C の 3 タイプに分類する。A タイプ：塊状の凸地形が残され、全面的に畑地をなすもの。B タイプ：微高地の本来の形態は明瞭で畑地が卓越するが、水田が入り組み一部で島畑状を呈するもの。C タイプ：原型が不明瞭で、水田と畑の割合が同程度か

または水田が卓越していて典型的な島畑をなすもの。第 3 図には 3 タイプの分布を示す。この分類は砂礫堆形成後の経過時間に対応しており、人工改変と水田の拡張化が A → B → C の順に進んだ結果と考える。すなわち、C が最も古く B、A の順に形成時期が新しいといえよう。この解釈は本地区の島畑景観の性質や形成過程について再検討の必要性を意味する。城陽市西部の荒洲（アラス）とよぶ A タイプの形成期について、1859（安政 6）年 8 月 14 日の洪水で「寺田村堤下 230 間決壊、寺田・久世・平川・上津屋で田畑床掘、砂入り」という記述がある[12]。これは荒洲の分布と一致し、堤下には侵食による溝地形が分布している。明治 9 年に同じ場所で破堤し荒洲に浸水、荒地化したため地租無償の処置が取られている[3]。両資料から、荒州が 1859 年と 1876 年の 2 度の洪水によって形成された可能性が高い。大矢・久保[10] は八幡市岩田の A タイプが万延元年の大住切れに対応する？としている。現段階では、A タイプが江戸期後期かそれ以降の洪水流により形成された可能性がある。今後、A、B、C タイプの形成過程や年代を史料や発掘資料などから明らかにすることが課題である。一方、砂礫堆は上流では流路に沿ってみられるが、下流では現流路から離れて分布するものが多い。第 5 図は A、B、C のタイプごとにグループ化した分布図であり、木津川流路の変遷、氾濫の範囲と方向を示すものとみなせる。下流域では流路や氾濫域が大きく変化してきたことを示す。

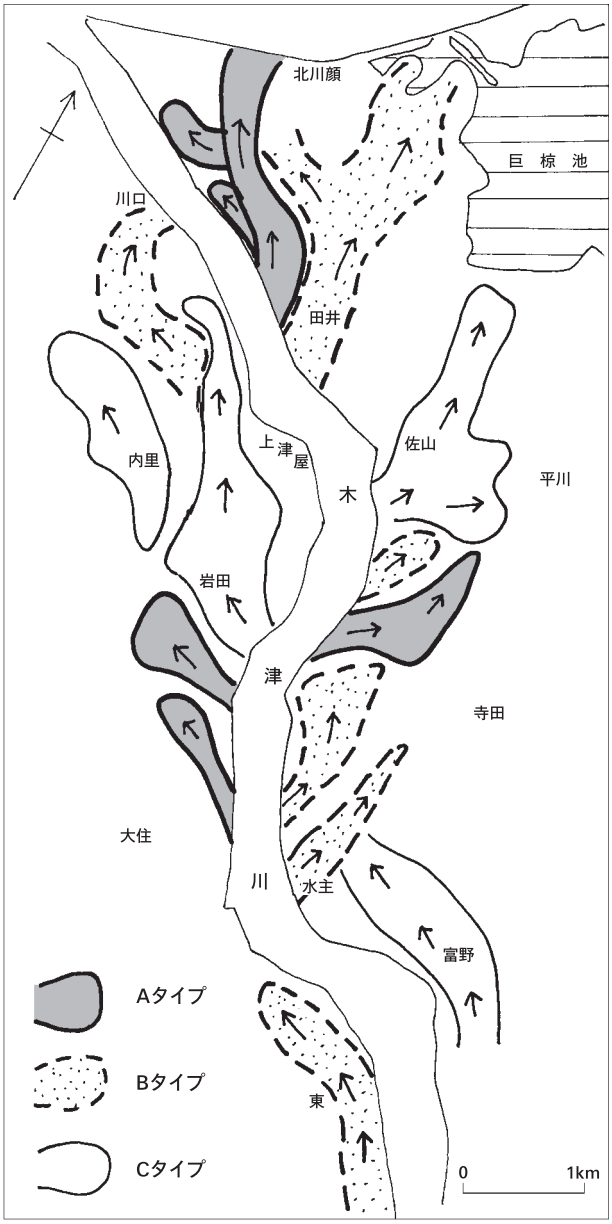
2　堤内池沼の分布

両河川の流路沿いに多数の堤内池沼が存在していた。これらは地元でふち（淵）と呼ばれており、成因的には河川の洪水氾濫と密接に関連する地形と考えられる。大矢・久保[10] は木津川右岸に 12、左岸に 14 を報告している。今回、地形図と空中写真からその分布と成因を判読、池沼に河川の右岸、左岸ごとに番号を付し第 3 図に示した。木津川左岸（KL）に 30、右岸（KR）に 20、宇治川左岸（UL）に 22、右岸（UR）に 7、総計 79 を認めた。これは明治 18 ～ 21 年の仮製地図以降の地形図に示されたものに限り、近接して分布し一連の作用により形成されたものはまとめて示した。また、ため池や人為的掘削によるものは除外した。これらの位置、特徴、成因、地図表現について整理した（詳細は別に報告予定）。その成因として A : 洪水時の侵食によるおっ堀（切れ所池）、B : 内水の排水不良や堤下からの漏水による湛水、C : 旧流路の残存、D : その他、E : 不明に分類した。

これらの特徴を以下に要約する。①両河川とも右岸側より左岸側に多く分布する。右岸には活断層を伴う隆起山地が近接して低地の幅がせまく、急勾配の低地が河道に向かって発達しているのに対し、左岸側の低地は緩勾



第 4 図　京田辺市大住北方、砂礫堆タイプ A の地質断面、文献 11）より作成



第 5 図　木津川における砂礫堆の分布と氾濫方向

配で幅が広く氾濫が生じやすいと考えられる。②著しく分布密度の高い部分が3地区に認められる。Ⅰ地区：木津川左岸の精華町山田川以北～飯岡以南で、砂礫堆内やそれと木津川堤との間に分布する小規模なものが多い。Ⅱ地区：木津川左岸防賀川～手原川間で、支流の天井川と木津川の合流部付近に分布し、内水や湧水の排水不良により湛水したものが多い。Ⅲ地区：宇治川左岸の宇治から向島間で、侵食性のおっ堀に起因するものが多い。③上流の宇治・槙島地区には方向性をもつ細長いもの、下流の向島地区には円形のものが多い。この差異については、池田他[13]の細長い形態は地表下の洗掘されやすい軟らかい地層がうすい場合に波状跳水により洗堀深は浅く、逆に洗掘されやすい地層が厚いともぐり噴流が生じて水深の大きなおっ堀が形成されるという実験結果が参考になる。④宇治川左岸には形成年代が推定できる例がある。『槙島村洪水絵図』は1868（慶応4）年のお釜切れの状況を描いていると推定される[14]。絵図の破堤状況から、宇治橋下流のUL2、3、4およびUL9がこの際に形成されたおっ堀とみられる。木津川では城陽市富野のKL14（六ヶ池）は1846（弘化3）年および1852（嘉永5）年の破堤、同市寺田のKL17は1859（安政6）年の破堤により形成された可能性が高い。今後、成因や形成年代を明らかにする必要がある。⑤堤内池沼は昭和30年代以降の開発により大部分が埋立られて消滅し、住宅地、工

第 3 図　木津川・宇治川低地の地形分類図

場用地、ポンプ場や公園の用地として利用されている。これらは災害危険地形であり、防災の立場からその位置や土地利用、改変状況を把握しておく必要がある。

Ⅳ. 木津川・宇治川における水害の発生履歴と特色

1　水害発生の時代的変化

両河川および比較のため鴨川における約 400 年間の水害を概観する。第 6 図は 1590 ～ 1989 年までの水害発生数の変化を 10 年ごとに整理したものである[15]。400 年間に発生した水害は木津川 100 件、宇治川 67 件、鴨川 59 件で、木津川の発生数が著しく多い。木津川では 1660 年以降に水害が多発するようになり、特に 1710 ～ 1729 年および 1840 ～ 1859 年の 2 時期に著しい集中発生がみられる。両期の間にも、1770 ～ 1789 年や 1800 ～ 1819 年の発生数の多い時期がはさまれる。明治以降 1959 年まで発生回数は減少するが、相変わらず発生が続いてきた。これに対して、宇治川では 1710 年以降に顕著な発生がみられる。1740 ～ 1749 年、1770 ～ 1779 年、1800 ～ 1809 年と 30 年周期で多発期があらわれ、1830 ～ 1859 年の集中発生のピーク期へむかって徐々に発生数が増加していく。明治以降にも相当数の発生があり、1950 ～ 1969 年の多発期を最後に以後発生はない。一方、鴨川では 1600 ～ 1629 年

の早い時期から多くの発生をみる。1670 ～ 1679 年以後は 1710 ～ 1719 年、1740 ～ 1749 年の約 30 年周期で多発のピーク期をもちながら、1770 ～ 1789 年の最大集中期へ向かって発生回数が徐々に増加していくように見える。それ以後にも 1840 ～ 1859 年や 1930 ～ 1939 年に発生の多い時期が存在するが、1940 年以降は発生していない。以上のように、三川における水害発生数の変遷はそれぞれに個性を有し、その特徴はかなり異なっている。今後は史料の厳密な検討をおこなうとともに、時代的変化の原因を明らかにする必要がある。それには、各流域の自然特性と開発や改変の状況、気象とくに梅雨や台風による降雨の時・空的特性の復原、河川改修や砂防工事の進行と影響など多岐にわたる要因の分析が不可欠であろう。

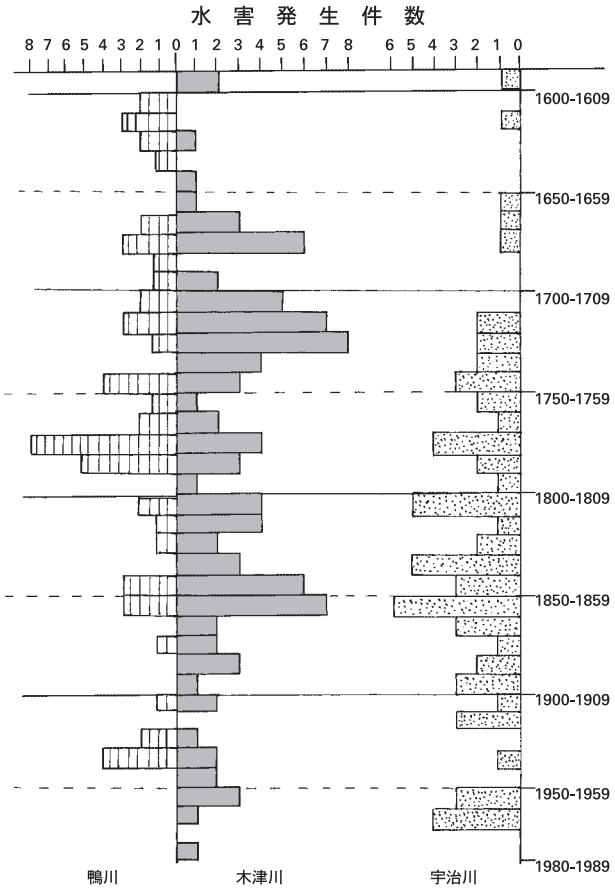
2　木津川の高水位と不作引高

1）高水位記録　近代的水位観測以前の河川水位については断片的資料しか存在しないことが多い。しかし、木津川上流の上狛村（旧山城町）には長期間にわたる高水位の記録が残されている[16]。上狛村は木津川が山城盆地に入る谷口右岸に位置し、そこでの高水位は下流全域の洪水状況を支配するものといえる。水戸[16] によると、木津川の増水時に上狛村は水位状況を伏見奉行などへ報告することが義務づけられていたという。その性質上、水位記録の信頼性はかなり高いといえる。そこで 1735 ～ 1846 年の 112 年間の高水位記録を第 7 図に示した。これには 1743 ～ 1764 年間の資料を欠くが、1747 年および 1802 年の大洪水時の水位を 1 丈 6 尺として破線で追加した。この図から次のような特徴が読み取れる。① 1.5 丈（約 4.5 m）を上回る異常な高水位は 1747 年、1773 年、1802 年、1808 年、1815 年および 1846 年の 6 回発生しており、平均 30 年程度の周期をもって繰り返してきた。②これらの高水位は突発的に発生したのではなく、水位が徐々に上昇を続けてきた結果としての最終局面で発生する。また、発生直後から約 10 年間は低い水位が継続している。③ 1 丈以上の高水位の発生頻度は 1820 年以降にそれ以前より明らかに高くなった。以上の特徴は、約 30 年周期で洪水による土砂堆積と河床上昇が進行し、ついには 1.5 丈前後の異常な高水位に達して水害が発生したことを示す。水害直後には堤防の補修や河床土砂除去のための川ざらえにより河床低下が生じ、約 10 年程度の低水位が続いた後、再び河床上昇が著しくなるというサイクルが認められる。一方、1820 年以降に高水位が頻発するのは、大量の土砂堆積、川ざらえの不徹底のいずれか、または両者の複合により生じた可能性が高い。

2）不作引高の変化　北河原村（旧山城町）には 1660 年～ 1866 年の 207 年間にわたる不作引高の記録が保存されている[16]。北河原村は鳴子川南岸の微高地に位置し、木津川との間の低地を耕作してきた。1688（元禄元）年以前の太閤検地による村高は約 234 石で 95 ～ 127 石余の永荒が含まれているが、1689 年以降採用された延宝検地による年貢は約 161 石で永荒は一切みられない。第 8 図は水戸[16] による成果を改変して図化したもので、水損・風損、砂入、淵成・川成による不作引石高のみを示した。また、淵成・川成による不作の影響は長期に及ぶと判断し初出時のみを採用した。これは第 7 図の高水位記録の全期間を含む。しかし、木津川による被害と鳴子川や内水に起因する被害とを区別できない点に留意する必要がある。これから読み取れる点を以下に要約しておこう。①約 100 石に達する大きな不作引を生じた被害は 1708（宝永 5）年、1712（正徳 2）年、1717（享保 2）年とこの 10 年間に集中発生している。さらに 98 石の 1768（明和 4）年、104 石の最大不作引高を生じた 1802（享和 2）年も著しい。②上の 1708（宝永 5）年、1712（正徳 2）年、1717（享保 2）年の 3 回に 1716（享保元）年の 57 石引を加えると、この 10 年間に 4 回の水害が連発し大きな被害を受けた。水戸[16] はこの状況を正徳・享保飢饉とよぶことを提案している。③これ以後にも 1735（享保）20 年、1740（元文 5）年、1756（宝暦 6）年と続き 30 ～ 45 石程度の不作引が生じており、1768 年（明和大水害）へ連続していく。このように、1708 年から 1768 年までの約 60 年間は水害が頻発して大被害を繰り返し受け、悲惨を極めた特異な時期として注目に値する。④一方、1825（文政 8）年以降 1865（慶応元）年までの間には不作引はなく、大きな被害を受けず安定した収穫が続いた。前項での木津川の高水位状況を考慮すると、これは堤防改築や内水処理が進み被害が軽減された結果であろう。この時期、逆に下流部では水害が頻発するようになる。

V．過去約 400 年間の水害史

木津川、宇治川の水害については、堀井[17, 18]、巨椋池土地改良区[19]、井手町史編集委員会[20]、水本[21]、水戸[22, 23, 24] など多くの研究が発表されてきた。近年、市町村史類の編さん・刊行が進み、水害資史料の検索、調査が容易になった。しかし、自治体単位で区切られており、

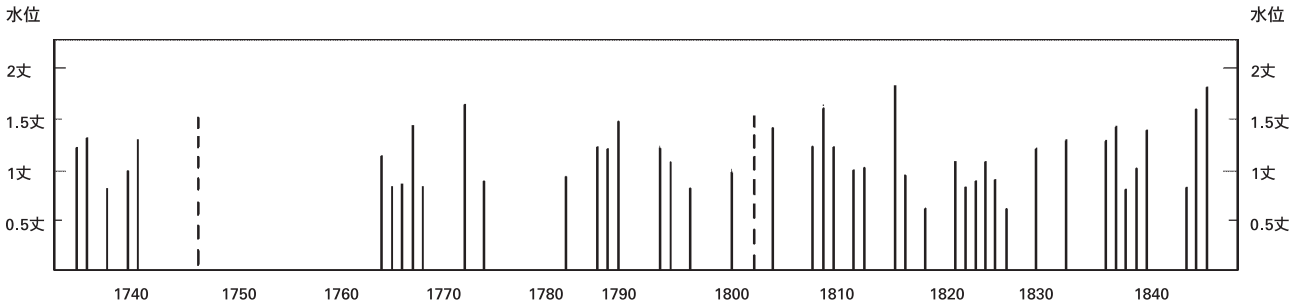


第 6 図　木津川・宇治川・鴨川における過去 400 年間の水害 10 年ごとの頻度を示す、文献 15）より作成

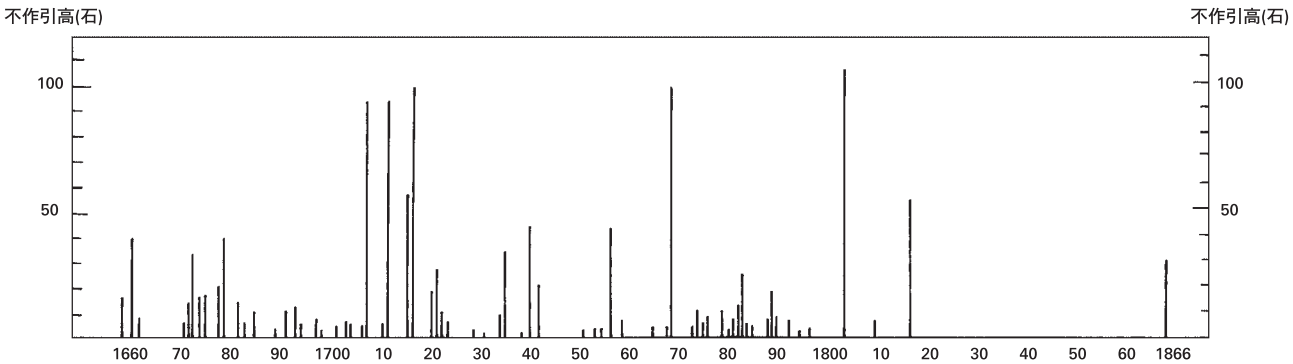
災害の全体像や河川流域を通じての地域差などを明らかにすることは困難である。今回、大学院での共同作業として既刊の市町村史を材料として自治体ごとの水害資料を収集、整理した[25]。その際、木津川と宇治川の氾濫および巨椋池に起因するもので、被害を受けた地名と内容が正確に把握できるもののみを取り上げることにした。そして、年表（第 1 表）および 10 年ごとの発生頻度グラフ（第 9 ～ 11 図）を作成し、それらから地域ごとの水害の特色を判読することにした。以下の内容は大学院生 6 名による作業結果を編集したもので、市町村史の内容および担当者の記述に精粗があることを了解いただきたい。なお、木津川では城陽市・京田辺市域を中流とし、それ以南の自治体は上流域、以北の自治体は上流域に含めて記述している。

1　木津町

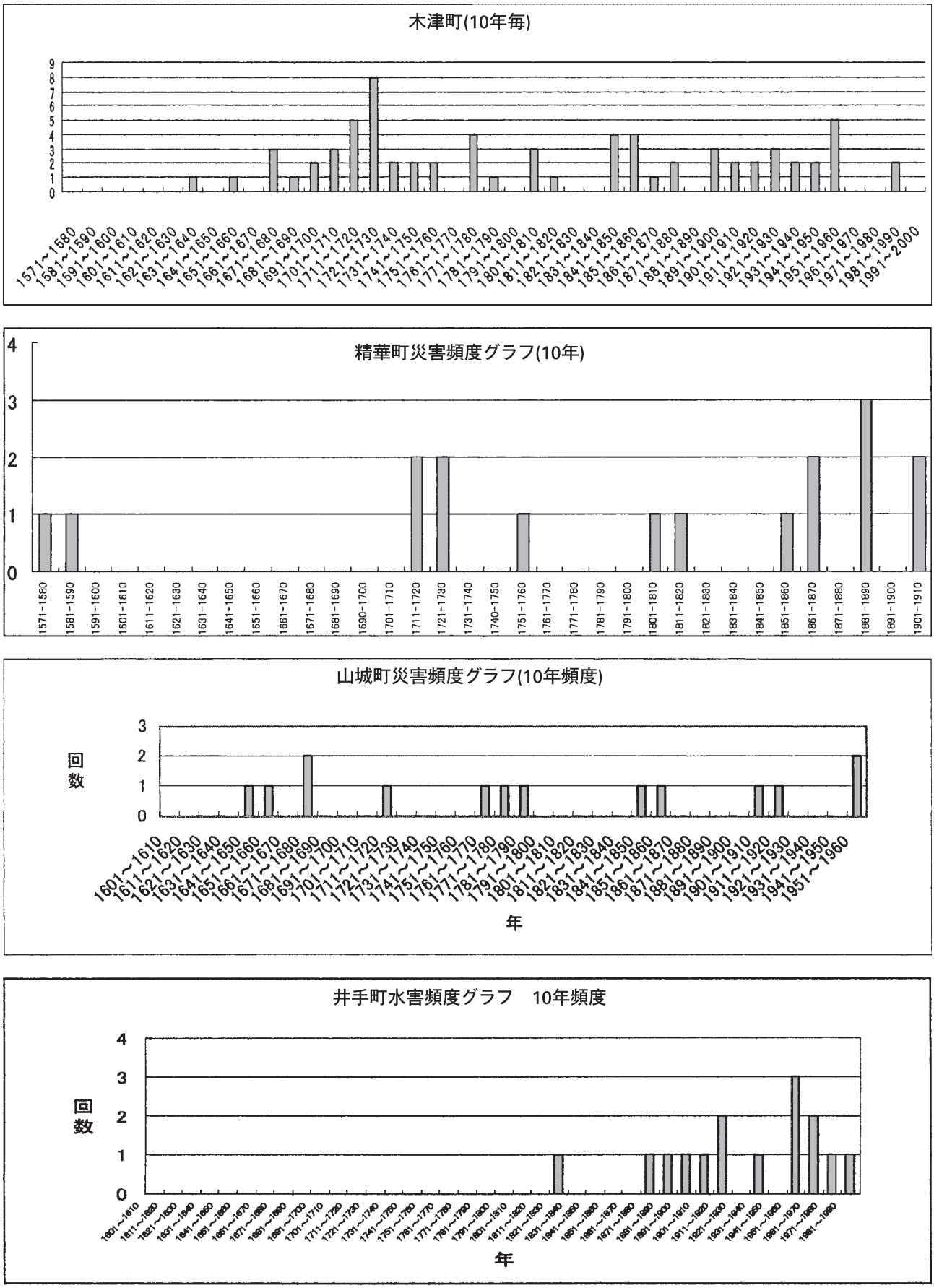
木津川の谷口左岸で流れが北へ大きく屈曲する部分に位置するため、木津川による破堤が多い。また、南西部の三角状低地には井関川、鹿川、山松川、山田川など多くの天井川化した支流が存在し、破堤や溢流を生じてきた。このため、7 年に 1 度の頻度で水害が発生している。1802（享和 2）年の水害については、「本町東南の大樋の堤が切れたため町中大水となった。…（中略）…木津西



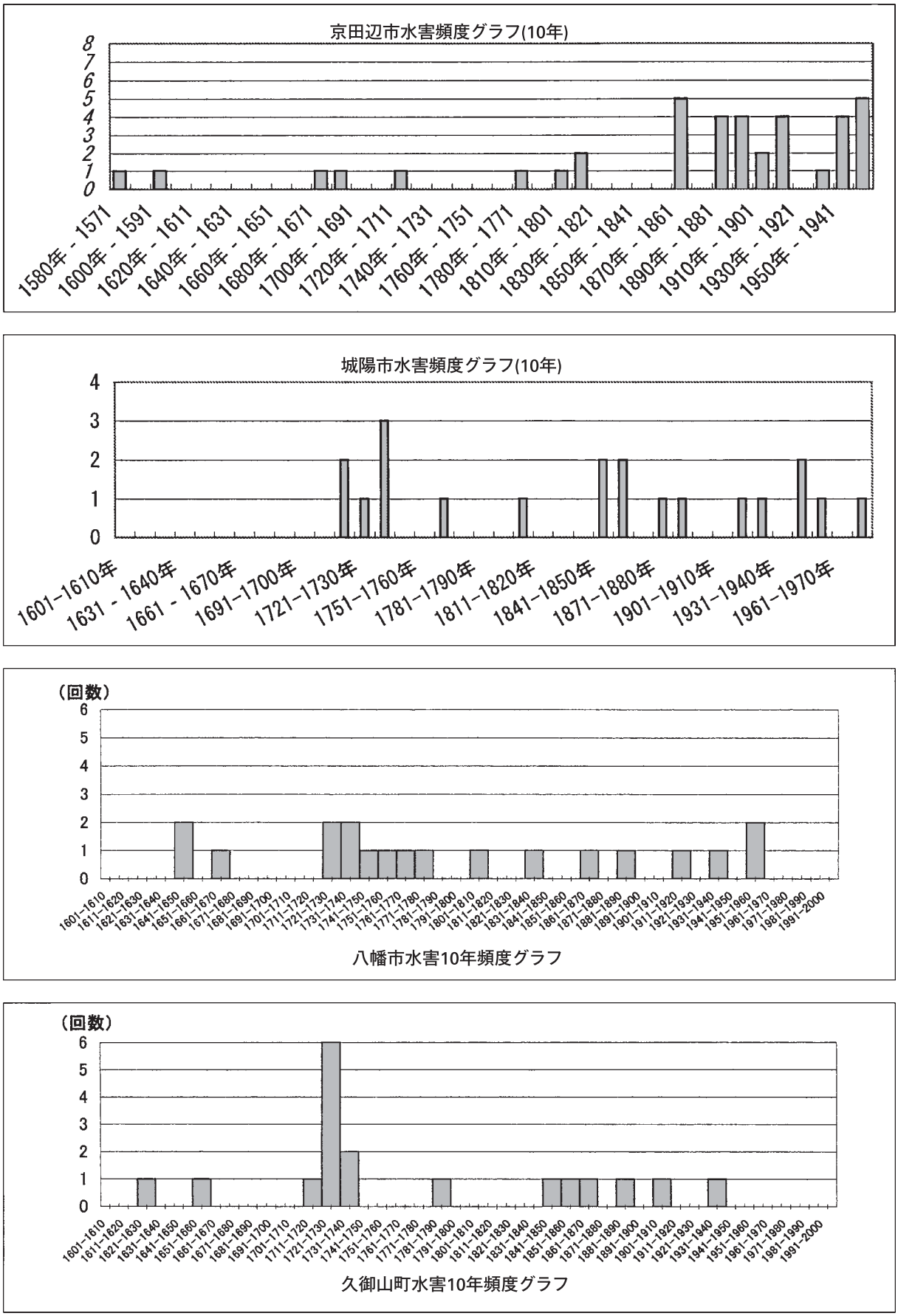
第 7 図　木津川（上狛村）の 1735 ～ 1846 年間の高水位記録、文献 16）より作成



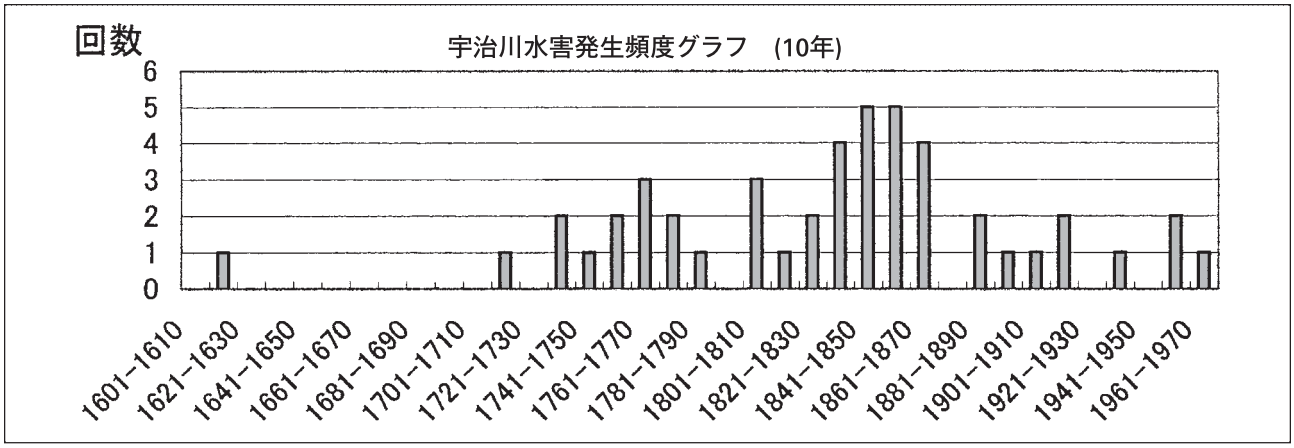
第 8 図　北河原村の 1660 ～ 1866 年間の不作引高、文献 16）より作成

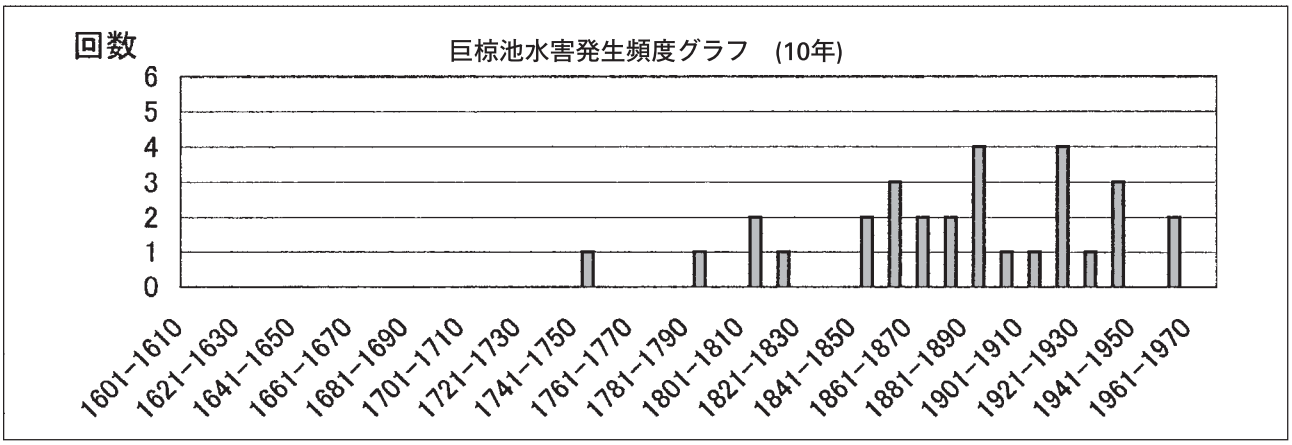


第 9 図　木津町・精華町・山城町・井手町の水害発生頻度



第 10 図　京田辺市・城陽市・八幡市・久御山町の水害発生頻度





第 11 図　宇治川・巨椋池の水害発生頻度

側の川口屋の家屋は祝園村まで流されてしまったという。…（中略）…木津出垣内の西の方では山田川が切れ込み、1 メートル前後も水に漬かった。」と記録されている（井上町の「年代記」）。また、「木津川堤のうち小寺口・町口で崩所や切所が生じ、さらに不成柿（宮ノ裏町付近）で 3ヶ所、百間堤（塩田付近）で 2ヶ所の堤切れ、鹿川で 6ヶ所、井関川 1ヶ所の堤切れ・堤崩れがあった。」と記録している（岡田卓穂家文書）。木津の住民は家財道具などを土蔵や 2 階に移動させるなどの水害対応をしてきたが、今回の水害は 2 階まで水漬きとなった為に大被害をだした。1815（文化 12）年の水害は、享和の水害よりさらに 1 メートル程高かったらしく、荒所となった小字名には内垣内、雲村、宮ノ裏、川端など木津川堤隣接部と、鹿川東側の田中前、小林、馬ヶ瀬、八ヶ坪、上戸、川原田、片山、八後、宮ノ内、釜ヶ谷などがあり、被害は広域に及んだ。なお、水害頻度を見ると、近世中〜後期では木津町より上流側の加茂町での発生が多く、1900 年以降には逆に木津町で多くなっている。

2　精華町

精華町は木津川上流左岸をしめ、古くは 1580 年と 1590 年に水害が起こっている。しかし、1600 年代には全く発生した記録がない。1700 年代前半には 1712 年、1716 年、1728 年 7 月 8 日・8 月 3 日と 4 件生じているが、後半では 1756 年のみである。1800 年代前半には 1802 年と 1815 年に 2 件起こっており、両水害の詳細な様子が記された史料が存在する。また、1800 年代後半には水害が頻発するようになる。このような年代の差は史料の残存状況に左右されるところが大きいと考えられる。水害発生地点は上流側から順に菅井村、祝園村、下狛村、菱田村である。1712 年、1716 年、1728 年の 7 月・8 月、1802 年、1859 年、1870 年では祝園村が、1756 年、1802 年は菱田村で水害を受けている。1815 年、1859 年、1870 年は下狛村、1870 年、1885 年は菅井村で、1889 年の 8 月・9 月、1903 年の 7 月・8 月は狛田村（下狛村と菱田村が合併）で発生している。すなわち、祝園村は全期間中を通じて被害を受けてきた。菱田村は 1700 年後半から 1800

年初頭に被害が著しく、下狛村は 1800 年代を通じて、1800 年代後半には菅井村と狛田村というように、発生位置が移り変わっている。祝園村南字古屋敷は1712（正徳2)年など数回の被災を契機に約60軒が西側山よりの榊ヶ坪と樋尻に全戸移転した。

3　山城町

山城町は木津川屈曲部の右岸を占めるが、水害数は多くない。10 年周期のグラフをみると、20 年に 2 回程度水害が発生した後、その後 30 ～ 40 年間は発生がないようにみえる。グラフには具体的な被害状況が書かれたもののみを採用したため、水害数は相当少ない。近世の木津川による被害状況をみると、椿井村や上狛村、北河原村の名が数回見受けられる。1650 年、1660 年、1675 年には椿井村内の堤が切れているし、1781 年と 1846 年には上狛村が被害に遭っている（浅田（北）家文書)。上狛村は木津川急折部の北側に位置し、椿井村はその北にある。近世においては木津川が大きくカーブする地域で被害が多かった。1678（延宝 6）年には上狛村で堤をこえて水が出るので長さ 160 間（288 メートル）にわたって堤高を 1 間高くしたという記述もある。近代になると被害地域が変化する。渋川・天神川・不動川・鳴子川の支流が氾濫して水害を発生している。これらは著しく天井川化しており、洪水時には土石流や鉄砲水が発生する。また、天井川に囲まれた袋状の低地は排水が悪く、冠水や湛水といった内水被害が頻発した。1953（昭和 28）年 8 月・9 月の水害時の被災地も天井川周辺に多い。昭和 28 年水害では上狛村の被害はみられない。本町では近世において上狛村、椿井村で被害を受けたが、近代になると渋川・天神川・不動川・鳴子川の沿岸部で被害が多発している。上狛村周辺は近世時から治水工事がなされたため水害を受けにくくなり、逆に天井川の発達により支流での水害が増加したといえよう。

4　井手町

本町は山城町の北につづく右岸にあるが、近世の被害記録が少ないため明治以降の状況をみたい。多賀の南谷川で決壊がたびたび起こり、1917 年には家屋浸水、1953 年には家屋が流失、全半壊などが生じた。南谷川右岸は谷底低地で、浸水による湛水期間は長くなる。玉川、渋川もたびたび決壊しており、玉水付近が被害を受けてきた。1953 年 8 月の玉川の破堤と大正池、二ノ谷池の堤決壊による鉄砲水で壊滅的な状況に陥った。玉川、渋川とも天井川であり、堤防が決壊すると集落が深刻な洪水被害をうけるのである。しかし 1953 年に渋川下流右岸は決壊するが、上中流の微高地では被害を免れている。蛇谷川や才田川などでも氾濫が生じているようである。青谷川でも同様に天井川沿いの微高地が洪水を免れている。本町では谷底低地や扇状地に位置する集落で水害が多く、微高地で被害が少ないことがわかった。

5　京田辺市

中流部の屈曲部左岸に位置する本市では、近世・近代を通じて発生場所が特定できる水害が 28 回発生した。明治以前における発生数は 10 回あり、享和から文化年間（1801 ～ 1817）にかけて一つのピークをもつ。明治以後では、明治初年度、明治 20 年前後、明治 29 年に水害が頻発している。1868 ～ 1870（明治 1 ～ 3）年にかけて 5 回、1884 ～ 1889（明治 17 ～ 22）年にかけては 4 回、1896（明治 29）年には 4 回も発生した。いずれも 8 月から 9 月に集中している。被害は木津川の屈曲部付近の宮津や三山木、大住において堤防決壊が頻発した。上流側にあたる宮津・三山木地区では木津川がゆるくカーブする屈曲部に飯岡が障害としてそびえており、その上手で水害が発生する傾向がみられる。大住地区は木津川の水衝部にあたり、計 14 回も堤防が決壊している（内 2 回は決壊個所不明)。うち 6 回が小字志保、川端、大荒内で発生した。大住地区は木津川水害の半数を占めるほどの常習地域であることを示している。

6　城陽市

本市は京田辺市の対岸に位置するが、木津川水害は近世から現代まで 19 回を数える。明治以前は 9 回、明治以後は 10 回とほぼ半分ずつに分かれている。水害の発生にはピークがあるわけではなく、定常的に発生しているようにみえる。しかし、享保年間（1716 ～ 1735）後半には多く、1728（享保 13）年に上津屋で決壊して以降、1731（享保 16）年、1735（同 20）年と 1 回ずつ計 3 回起こっている。発生地域は上流の富野、下流の寺田、上津屋の 3 地区である。ここでは富野村で堤が切れると下流の寺田村や上津屋村では切れず、逆に富野村で決壊しなかった場合には寺田村・上津屋村付近で決壊するというパターンがみられ、破堤地の移動が繰り返されている点が注目される。富野村と寺田・上津屋両村の対岸に大住村が位置しており、これら 3 地域の関係を検討する必要がある。すなわち、木津川の屈曲部両岸における水害は交互に発生する傾向がある。多少のずれはあるが、上流部の富野村、中流部の大住村、下流部の寺田村・上津屋村

の順で上流から順に水害が発生しているようにみる。つまり、富野の木津川屈曲部、大住の屈曲部が切れやすく、その 2ヶ所が切れなかった場合に下流の寺田村・上津屋村で切れるという傾向をもつのである。また、文化年間（1804 ～ 1817）に大住村で、弘化・嘉永年間（1844 ～ 1854）に富野村で集中的に水害が生じている。これらはそれぞれの村で発生年が連続しており復旧作業の途中に次の水害が発生したと考えられないだろうか。そうだとすると、この 3 地域では水害後に復旧・復興をした地域ではその後しばらく水害が発生せず、下流地域に水害発生地点が移動したのではなかろうか。

7　八幡市

本市は木津川最下流左岸に位置する。木津川は 1870（明治 3）年 1 月完工の付替え工事によって八幡市橋本付近で淀川と合流するようになった。このため、木津川下流域の水害発生位置や状況は大きく変化している。ここでは旧流路左岸に位置していた伏見区際目、生津を八幡市に含めて扱う。本市での水害は 18 回、生津、岩田での発生が全体の半分以上を占める。生津は旧流路沿いの集落で、対岸には島田が位置している。岩田は下流地域のなかでは最上流部に位置する集落で、すぐ南は京田辺市になる。本市では比較的定常的に水害が発生しており、とくに 18 世紀に集中して発生する。また、流路付替え後も比較的多くの水害を発生している。

8　久御山町

久御山町の水害は 18 回で八幡市と同数である。本町においては 1721 ～ 1730 年前後の約 10 年間に 6 回の水害が発生している。この 6 回に関しては発生場所や被害箇所などの情報が得られなかった。しかし、木津川下流で 18 世紀前半に水害発生が集中したことはほぼ間違いない。また、島田・藤和田・北川顔といった旧流路沿いの集落で比較的発生が多かった。特に島田で最も頻度が高い。本町の水害発生には時期に偏りがあり、付替え工事以後発生回数が減っていることがわかる。また、流路付替え前の旧木津川流路部分と、下流最上流部で多く発生していること、木津川の右岸と左岸では水害発生時期に違いがみられる。なお、本町には大池堤および中堤とその延長部によって佐山組および御牧郷の二つの輪中が存在していた。

9　宇治市

宇治川の 17 世紀以降の水害発生数は 57 件、うち 47 件は洪水による被害の状況や破堤地点を確認できる。水害発生は 18 世紀第 2 四半期から増加し 19 世紀第 2 四半期の 11 回をピークとし、それ以後は減少していく。水害発生が 25 年間に 5 回以上を数えたものは 18 世紀第 3 四半期・19 世紀第 2 四半期・19 世紀第 3 四半期の 3 期であり、このうち 19 世紀第 2・3 四半期の 50 年間で全体の 4 割を超える。10 年ごとのグラフでみると、1831（天保 2）年から 1870（明治 3）年までの 40 年間に水害が多発した。堤防決壊や被害発生地点をみると、興聖寺門前から槇島村南部にかけての被害が多い。これは宇治川の谷口に宇治市街地が形成されたことに起因する。近世の槇島村や大鳳寺村、岡屋村でも水害発生が多い。槇島村は宇治川左岸に位置し長大な槇島堤と南部には薗場堤が築堤されている。近世の水害は槇島堤や薗場堤の堤切れによるものであった。1868（明治元）年の洪水（御釜切れ）は大規模なもので、宇治橋下流の宇治郷と槇島村との境界付近の堤（槇島堤）が 200 間余（約 400 m）に亘り決壊し、槇島村の田地や家屋に多大な被害を及ぼした。同時に薗場堤も決壊している。一方、右岸側では大規模な堤防はなかったが、大鳳寺村の善五郎堤・久太郎堤、岡屋村の西田堤など小規模な堤が右岸各所に築堤されていた。これらも幾度か堤切れを起こしており、右岸の各村も水害に見舞われた。とくに 1855（安政 2）年 8 月 20 日の水害は大規模で、大曲付近や岡屋村西田堤など 7ヶ所が決壊し、各地で浸水被害が発生した。この被害を記録した「城州洪水図」[14] が後に作成されている。

10　巨椋池

巨椋池（大池）は小倉堤（太閤堤）・大池堤（東堤防）・中池堤の大規模な堤が築かれており、これらにより二ノ丸池（東池）・大池・中内池・大内池に分かれていた。近世には巨椋池に面して小倉村、伊勢田村、安田村、市田村、相島村、森村と東西の一口村などが存在した。巨椋池周辺の水害は 18 世紀第 2 四半期以降に記述があり、それ以前の記録が存在しない。18 世紀に 2 回であったが、19 世紀以降に回数を増していく。19 世紀第 3 四半期から 20 世紀第 1 四半期までの 75 年間だけで全体の半数を超える水害が発生した。10 年単位で見てみると、1881（明治 14）年から 1890（明治 23）年までの 10 年間と、1911（明治 44）年から 1920（大正 10）年までの 10 年間に各 4 度と最も多発している。これらは池への流入水量の増加と巨椋池の水位上昇により湖岸周辺が被害を受けた。1910 年代の大規模改修工事に伴い、巨椋池は宇治川と切離され独立した池に変化した。また、1911 年からの 10 年

間に 4 回の水害が発生したのは、改修工事により巨椋池の水位が上昇したためと推察される。

VI. ま と め

1）木津川・宇治川低地の地形分類図を作成した。その結果、砂礫堆を形成年代の新しいものから順にタイプ A、B、C に分類した。また、木津川沿いに 50、宇治川沿いに 29 の堤内池沼を認めた。それらはおっ堀、内水や漏水による湛水、旧流路などに起因する。

2）過去約 400 年間の木津川・宇治川の水害発生履歴を 10 年ごとの頻度から検討した。木津川では 18 世紀前期と 19 世紀中期に著しい集中期がみられる。宇治川では 18 世紀前期から約 30 年周期で多発期があらわれ、19 世紀中期の集中期へ向かって増加していく。

3）木津川の高水位を上狛村の 1735 ～ 1846 年間の記録により検討すると、約 30 年周期で低水位から高水位にいたる上昇サイクルが認められた。北河原村の 1660 ～ 1866 年間の不作引高の変化の検討から 1708 ～ 1768 年間の水害の集中期を認めた。また、1825 年以後に不作引がない理由を水害防止対策が実施された結果と推定した。

4）流域自治体ごとに水害発生の年表と 10 年ごとの発生頻度グラフを作成し、その特徴を検討した。木津川流域では 1710 ～ 1780 年間に上～下流を通じて水害発生頻度が高かったが、1850 ～ 1880 年頃には下流で水害が頻発するようになる。宇治川では 1835 ～ 1878 年頃、巨椋池では 1850 ～ 1890 年間に最も発生頻度が高くなった。

謝　　辞

この研究を進めるにあたって、京都府総務部防災室、国交省淀川河川事務所、各自治体の防災・河川・埋蔵文化財の担当者には資料収集に協力していただいた。京都大学防災研究所関口秀雄教授、東良慶氏には内容について討論していただいた。以上の皆さんに厚くお礼申し上げます。なお、平成 18 年度京都大学防災研究所、防災研究推進特別事業経費（研究代表者：関口秀雄）を使用したことを記し謝意を表する。

注

1）淀川百年史編集委員会『淀川百年史』、建設省近畿地方建設局、1974、1424 頁。
2）国土開発調査会『淀川その治水と利水』、1984、154 頁。

3）淀川・木津川水防事務組合事務局編『水防 50 年史』、1970、362 頁。
4）淀川・木津川水防事務組合事務局編『平成 18 年度水防計画』、2006。
5）谷岡武雄『平野の開発』、古今書院、1964、344 頁。
6）日下雅義「山城盆地南部の内水災害」、地理評 41、1968、505 ～ 519 頁。
7）中塚　良「水辺自然地誌学の試み」、『地形環境と歴史景観―自然と人間の地理学』、古今書院、2004、87 ～ 98 頁。
8）池田　碩・植村善博「南山城、木津川流域の段丘地形」、奈良大学紀要 9、1980、75 ～ 85 頁。
9）大矢雅彦「京都盆地巨椋池周辺の水害地形」、早稲田大学教育学部学術研究 32、1983、19 ～ 24 頁。
10）大矢雅彦・久保純子編『淀川水害地形分類図・説明書』、淀川工事事務所、1993。
11）田辺町教育委員会『京都府田辺町魚田遺跡第 1 次・第 2 次発掘調査概報―大住地区ほ場整備事業地内の調査その 1―』田辺町埋蔵文化財調査報告書第 22 集、1997、11 頁。
12）城陽市教育委員会『史料が語る城陽近世史―第二集・富野荘地域編』、1985。
13）池田　宏・伊勢屋ふじこ・三上　靖「おっ堀の形状に関する模型実験」筑波大学水理実験センター報告、6、1982、118 頁。
14）宇治市歴史資料館『宇治の古絵図　ふるさとの風景』、1989。
15）木津川は水本邦彦「江戸時代の木津川水害」、『南山城地域学術調査報告』、京都府立大学、1990 、1 ～ 13 頁、宇治川は林屋辰三郎・藤岡謙二郎編『宇治市年表』1983、鴨川は中島暢太郎「鴨川水害史（1）」、京都大学防災研究所年報、26B-2、1983、1 ～ 18 頁、により作成した。
16）水戸政満「近世木津川水害と年貢収納―川底の上昇による水害の深刻化―」、立命館文学 518、1990、197 ～ 253 頁。
17）堀井　篤「木津川流域の天井川と“うち水”について―特にその発達過程―」、地理評 28、1955、569 ～ 577 頁。
18）堀井　篤「淀川水系の治山治水と水害―その歴史的発達」、歴史評論 46、1953、57 ～ 63 頁。
19）巨椋池土地改良区『巨椋池干拓誌』、1962、828 頁。
20）井手町史編集委員会・南山城水害 30 周年記念誌編集委員会編『南山城水害誌』、1983、260 頁。
21）水本邦彦「江戸時代の木津川水害」、『南山城地域学術調査報告』、京都府立大学、1990、1 ～ 13 頁。
22）水戸政満「近世木津川水害と年貢収納―川底の上昇による水害の深刻化―」、立命館文学 518、1990、197 ～ 253 頁。
23）水戸政満「近世の土砂留普請論―山城国相楽郡の事例を通して―」、実学史研究Ⅷ、1992、67 ～ 110 頁。
24）水戸政満「近世における木津川治水への苦闘―南山城の事例を通して―」、実学史研究Ⅸ、1993、107 ～ 147 頁。
25）以下の資料を利用した。
木津町史編さん委員会編『木津町史本文編、史料編 1 ～ 3』、1984 ～ 1991。
精華町史編纂委員会編『精華町史本文編、史料編 1 ～ 2』、1989 ～ 1996。
山城町編『山城町史本文編、史料編』、1987 ～ 1990。
井手町史編集委員会『井手町の古代・中世・近世』、『井手町の近代Ⅰと文化財』、1982、1999。
井手町史編集委員会・南山城水害 30 周年記念誌編集委員会編『南山城水害誌』、1983。
田辺町近代誌編さん委員会『田辺町近代誌』、『田辺町近世近代資料集』、1987。
城陽市史編さん委員会『城陽市史　第 1 ～ 4 巻』1979 ～ 2002。
八幡市誌編纂委員協議会編『八幡市誌第1～3巻』、1980～1984。
久御山町史編さん委員会『久御山町史第 1 ～ 2 巻、資料編』、1986 ～ 1992。
久御山町郷土史会『久御山町の今昔』、1981。
林屋辰三郎・藤岡謙二郎編『宇治市史1～6、年表』、1974～1983。

第１表. 自治体ごとの災害年表（明治４年以前は和暦表記）

木津町水害年表

西暦	和暦	月日	発生時間	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1633	寛永10年	8月10日		洪水				
1660	万治3年	8月19日		風雨		田畑が水につかる		
1673	寛文3年	7月29日		大雨		高水により池川の堤が切れる	在所も浸水	
1674	延宝2年	6月14日		洪水		堤の大部分が切れ、田畑が荒れる	大和・摂津・河内も洪水	
1679	延宝7年	7月7～8日		洪水		木津山田などの堤が切れ、田畑が破損する		
1689	元禄2年	5月19日		洪水		蒔ノ島堤が切れる	80間余切れ、加勢人足が仰せ付けられる	
1694	元禄7年	6月14日		大雨		川尻が切れる		
1699	元禄12年	8月15日		洪水			木津川洪水	
1701	元禄14年	7月17日		洪水		川筋の村々が浸水	木津川洪水	
1707	宝永4年	10月4日		地震		木津川の所々で堤が破損		
1708	宝永5年	7月19日		大雨・洪水				
1712	正徳2年	8月18日	夜	風雨・洪水		堤防各所で決壊、流家・潰家700軒余、流死人100人余	木津川筋大洪水、前代未聞の大洪水	
1713	正徳3年	7月4日		大風・洪水		木津浸水		
1714	正徳4年	7月8日		大風・洪水		木津浸水、家屋90軒余流れる	木津川洪水	
1716	享保元年	6月19日		洪水		大水で堤切れ、川筋村々浸水	木津川大洪水	
1717	享保2年	8月16日		大風・洪水			木津川洪水	
1721	享保6年	閏7月9日		大風・洪水			木津洪水	
		閏7月14日		大雨・洪水		堤切れ、八幡領までの13ケ村が浸水	岩田村（八幡市）で堤大切れ	
		閏7月19日		大雨・洪水				
1722	享保7年	6月23日		洪水			木津川洪水	
		9月14日		洪水			木津川洪水	
		9月23日		洪水			木津川洪水	
1725	享保10年	5月15～17日		長雨・山崩れ		長雨にて山川の堤に切れ込み、山崩れ、田地損失		
1728	享保13年	7月8日		大風・洪水		川筋の堤が所々切れ込む、悪水井路大破	木津川洪水	
1731	享保16年	8月		洪水			木津川大洪水	＊以下の出典は『相楽神社当役記録』・『神事式旧記』より
1736	元文元年			洪水		洪水にて堤切れ		
1747	延享4年	8月19日		風雨・洪水		所々堤切れ込む		
		8月27日		風雨・洪水		所々堤切れ込む		
1753	宝暦3年	6月3日		大雨		大雨にて、所々山川、溜池堤切れ込む		
1756	宝暦6年	9月17日		洪水		木津川筋洪水で川筋が変化し、所々堤切れ込む、樋除堤が決壊		
1771	明和8年	8月22日		高水		木津川筋大高水、所々堤大破		
1772	明和9年	8月1日		大風			8月2日津波にて行方不明者多数	
1773	安永2年	6月20日		洪水		所々堤大破		
1776	安永5年	5月		洪水		尻谷池堤が決壊し、洪水		
1789	寛政元年			洪水		井関川の堤防切れ	大雨・洪水	
1802	享和2年	（6月29日）		洪水		木津川筋各所で堤切れ決壊、崩家多し、各地の天井川、溜池が氾濫	大洪水、加茂・木津の3ケ所で堤60間切れ、河内・摂津・丹波でも大洪水	

木津町水害年表

西暦	和暦	月日	発生時間	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1802	享和2年	(6月29日)		洪水		木津川筋各所で堤切れ決壊、崩家多し、各地の天井川、溜池が氾濫	大洪水、加茂・木津の3ヶ所で堤60間切れ、河内・摂津・丹波でも大洪水	
1803	享和3年	8月17日		洪水		不成柿樋の堤切れ、家損多し		
1804	文化元年			洪水		相楽の庄下堤切れ、洪水		
1815	文化12年	6月26～27日		洪水		木津領4ヶ所堤切れ、潰家、他小屋・土蔵多し、相楽の堤切れ	鹿背山領塩田などの田地が淵になる	
1844	天保15年	8月28日				木津川筋、淀まで堤が切れる		
1845	弘化2年			洪水			木津川洪水	
1846	弘化3年	7月7日		風雨		大風雨で木津堤切れ	木津川洪水	
1848	嘉永元年	8月9～13日		洪水		鹿背山・木津で堤切れ、淀まで所々堤切れ	大洪水	
1852	嘉永5年			洪水		六ケ池で堤に180間切れ込み、数日床上浸水	富野村18軒流失	
1855	安政2年			洪水			木津川洪水	
1857	安政4年			洪水			木津川洪水	
1859	安政6年	8月12年		洪水		鹿背山領塩田が川床になる	大洪水	
1868	慶応4年	5月11日～		大雨		5月21日道川荒れ、山崩れ、各山川堤防決壊	大雨降り、津波のごとし、釜取谷など白海のごとし	
1870	明治3年			洪水			木津川大洪水	*以下は『木津町史』及び木津町ホームページより
1877	明治10年			洪水			木津川大洪水	
1895	明治28年			洪水			山城大水害	
1896	明治29年			洪水			山城水害	
1900	明治33年			洪水			山城水害	
1903	明治36年			洪水			山城大水害	
1906	明治39年			洪水			木津川流域水害	
1911	明治44年			洪水			山城地方大水害	
1917	大正6年			洪水		多賀堤防決壊、下狛で決壊	木津川大洪水、下津屋で決壊	
1923	大正12年			洪水			山城水害	
1925	大正14年			洪水			山城水害	
1928	昭和3年			洪水			山城水害	
1934	昭和9年			台風			室戸台風災害	
1938	昭和13年			洪水			山城地方大水害	
1949	昭和24年			台風			台風デラ・ヘスター災害	
1950	昭和25年			台風			ジェーン台風災害	
1951	昭和26年			大雨		小河川氾濫		
1953	昭和28年	8月		洪水			南山城大水害	
		9月		台風			13号台風災害	
1956	昭和31年			増水			木津川増水	
1959	昭和34年			洪水			伊勢湾台風災害、木津川大洪水	
1982	昭和57年			豪雨			集中豪雨	
1984	昭和59年			豪雨		井関川が決壊寸前	集中豪雨	

精華町水害年表

西暦	和暦	月日	被害地域	被害状況	その他	出典
1580	天正8	不明	木津川	不明		『精華町史』
1590	天正12	不明	木津川	不明		『精華町史』
1712	正徳2	8月19日	祝園村(字古屋敷)	祝園村で村内に水が8尺(2.8m)つき、300軒の家のうち220軒流れ・潰れる。53人溺死。野小屋・農具等も流		『精華町史』
1716	享保元	6月20日	祝園村	堤を押し切る。家屋50軒・農具・家財・米穀が流失。		『森島國男家文書』『精華町史』
1728	享保13	7月8日	祝園村	家屋90軒・農具・家財・米穀が流失。		『森島國男家文書』『精華町史』
		8月3日	祝園村	堤切れる。家潰れる。		『森島國男家文書』『精華町史』
1756	宝暦6	不明	菱田村	堤が30間(約54m)切れる。		『菱田区有文書』『精華町史』
1802	享和2	6月29日	祝園村、菱田村	水位1丈5.6尺(4.5m)祝園村の堤5ヵ所切れる。(北古川【ぬいふし】130間、字あら堀【水車】100間、若森80間、半道寺40間、70間)150軒の家のうち61軒流れ・潰れ、半壊の数多し。菱田村で5ヵ所250間堤切れ。		『森島國男家文書』『精華町史』
1815	文化12	6月27日	下狛村	字本庄付近の堤80間(約150m)切れる。字百久保で堤90間(約170m)切れる。出水の高さ1丈8尺(約5.5m)。堤切れ2ヶ所、堤崩れ5ヵ所、樋流失1ヵ所。		『精華町役場所蔵文書』『精華町史』
1859	安政6	8月13日	祝園村、下狛村	1丈8、9尺、ノリコシ切れ		『生蓮寺文書』「過去記」『精華町史』
1867	慶応4(明治元)	5月	木津川	不明		『精華町史』
1870	明治3	9月18日	菅井、祝園、下狛、柘榴、乾谷、山田	菅井北堤85間(154.7m)下狛百久保堤220間(約400m)破損。菅井・祝園・下狛・柘榴・乾谷・山田の田畑・人家に被害を及ぼした。		『精華町史』
1885	明治18	6月30日	菅井	菅井の馬渕・古里・二本松の堤防が崩れる。		『精華町史』
1889	明治22	8月18日 20日	狛田村	狛田村の木津川堤防3ヵ所、40間にわたって破損。		『精華町史』
		9月11日	狛田村	狛田村の木津川堤防6ヵ所、240間にわたって破損。菱田地区の堤防1ヵ所80間破損。		「洪水年鑑」『松田安司家文書』『精華町史』
1903	明治36	7月	狛田村	不明		『精華町史』
		8月	狛田村	不明		『精華町史』

山城市水害年表

西暦	和暦	月日	発生時間	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1588年	天正16年	2月7日		洪水		船が沈み、狛近辺などで死者が出る。	多門院日記	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1590年	天正18年	7月28日～29日		大雨・大風	山城国	山城国中海の如し。	多門院日記、浅田「浅田(北)家文書」等	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1650年	慶安3年	9月		洪水	樋井村領	樋井村領の堤切れる。	東大経「浅田(北)家文書	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1660年	万治3年	8月		洪水	樋井村領	樋井村領の堤切れる。	同上、徳川実紀	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1675年	延宝3年	6月3日			樋井村領	樋井村領の堤切2カ所。	同上	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1676年	延宝4年	5月6日			上狛村	上狛村の堤、樋、破損する。	同上	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1716年	享保元年	6月19日～20日		洪水	上狛村	上狛村の樋流失。	東大経「浅田(北)家文書	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1768年	明和5年	5月29日		水害	北河原村	北河原村水害、田地多く水損。	「北河原区有文書」	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1771年	明和8年	7月		洪水		ちさえ川・神童寺川堤切。	「大西(清)家文書」	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1781年	天明元年	8月27日		大風雨	上狛村	上狛村で家4軒流失。	東大経「浅田(北)家文書	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1846年	弘化3年	7月8日		大雨	上狛村	上狛村で堤が70間ほど切れる。	東大経「浅田(北)家文書	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1857年	安政4年	7月24日		洪水	平尾村・綺田村	不動川が洪水となり、平尾村・綺田村で被害が出る。	「西念寺文書」	上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1907年	明治40年	8月23日～26日		台風被害	府下全域	由良川流域での被害が大きかったが、木津川も大増水して加茂村で20尺6寸、上狛村で14尺4寸、井手村で17尺1寸の水位となった。		上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1917年	大正6年	9月29日～10月1日		台風	府下全域	木津川の大増水によって笠置橋・泉橋・玉水橋などが流失し、加茂・木津・上狛などで堤防が破堤した。南山城全域の田畑被害面積5180町歩、農作物被害見積価額64万6000円あまりの大被害となった。		上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1953年	昭和28年	8月14～15日		集中豪雨		南山城一帯で犠牲者336名、流失・全壊家屋752戸というきわめて甚大な被害をこうむった。		上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年
1953年	昭和28年	9月25日		台風被害		由良川が各地で決壊。宇治川が観月橋下流から決壊。京都府下では明治以来の大洪水となったが、この台風は雨台風の性格をもっており、強風を伴わなかったので、被害が大きかった割には人・家畜への影響が少なかった。		上田正昭 監修『山城市史』本文編 山城町役場 昭和62年

井手町水害年表

西暦	和暦	月日	発生時間	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1825年	文政8年			出水(木津川)	井手村	田畑浸水		井手町史編集委員会 井手町史シリーズ第三集『「井手町のくらしの歴史」』 昭和54年
1878年	明治9年	9月		増水(木津川)		多賀＝谷川決壊、流失家屋17戸、耕地13歩が冠水。	大雨による	井手町史編集委員会 井手町史シリーズ特別編『南山城水害史』 昭和58年
1885年	明治18年	7月1日～7月2日		大風水害	井手村、多賀村、三山木村(現田辺町)・薪町(現田辺町)、大野村(現加茂町)、枇杷村(現城陽市)	木津川・由良川が氾濫し、90年ぶりの大洪水といわれる。木津川筋では井手村付近で約91m、多賀村付近で約122mの被害。三山木村・薪町・大野村・枇杷村などで堤防が決壊した。		井手町史編集委員会 井手町史シリーズ特別編『南山城水害史』 昭和58年
1893年	明治26年	10月16日		水害	山城地方及両丹地方	木津川・宇治川・由良川などで出水。道路・橋梁などの被害が甚大。大雨により多賀＝谷川決壊。	京都、降水量132.7㎜	井手町史編集委員会 井手町史シリーズ特別編『南山城水害史』 昭和58年
1903年	明治36年	7月7日		大水害	久世・宇治郡中心	死者10名、重被害家屋314戸、軽被害家屋700戸。山科で疎水堤防が決壊。官設鉄道、奈良鉄道にも被害。	京都、降水量231.8㎜	井手町史編集委員会 井手町史シリーズ特別編『南山城水害史』 昭和58年
1917年	大正6年	9月29日～10月1日		台風被害	府下全域	南山城地方は明治3年以来の大洪水となり、死者11名を出し、玉水橋・泉橋・笠置橋等が流失。特に木津川筋の被害が甚大で多賀村・狛田村(現精華町)、加茂村大野(現加茂町)で堤防が決壊。このため多賀村では浸水家屋24戸。綴喜郡内で浸水家屋197戸、破壊人家4戸、被害堤防64か所2，622間(4，767m)。淀川の三栖(現京都市伏見区)からの下流域および大阪府下の被害も大きかった。	大河原、降水量123.0㎜	井手町史編集委員会 井手町史シリーズ第三集『「井手町のくらしの歴史」』 昭和54年
1919年	大正8年	9月		大雨		多賀＝谷川決壊		井手町史編集委員会 井手町史シリーズ第三集『「井手町のくらしの歴史」』 昭和54年
1934年	昭和9年	9月21日		室戸台風水害	府下全域	井手町は洪水を免れたが玉川堤防に植えられた樹木はほとんど倒れ、井手小学校の校舎が傾いた。校舎はその後改築。各家の屋根瓦は木の葉のように飛び散り、また出穂期の稲が大損害を受けた。		井手町史編集委員会 井手町史シリーズ第三集『「井手町のくらしの歴史」』 昭和54年
1952年	昭和27年	6月23日～24日		水害	府下全域	死者1名、全半壊家屋2戸、床上浸水家屋49戸、堤防決壊31カ所。井手町では玉川、多賀＝谷川、渋川がかなり洗掘された。	亀岡、降水量104.0㎜	井手町史編集委員会 井手町史シリーズ特別編『南山城水害史』 昭和58年
1953年	昭和28年	8月14日～15日		大水害	南山城	南山城地方では雷鳴を伴う集中豪雨により大災害。各地に未曾有の被害。死者336名、全半壊家屋904戸、床上浸水家屋2，851戸。井手町は大正池・ニノ谷池の決壊および玉川の破堤により壊滅的状況を呈し、多賀村でも多賀＝谷川の破堤などがあり、両町合わせて死者107名、全壊流失家屋278戸、半壊家屋168戸、床上浸水家屋274戸、床下浸水家屋235戸を出す。	湯船、降水量428㎜	井手町史編集委員会 井手町史シリーズ特別編『南山城水害史』 昭和58年
1953年	昭和28年	9月24日～25日		風水害	府下全域	台風13号の来襲により、府下全域に風水害。桂川・由良川で大洪水。宇治川の堤防が決壊し、旧巨椋池とその周辺に大洪水。死者117名、全半壊家屋4，989戸、床上浸水家屋22，756戸、堤防決壊3，415か所。井手町では玉川・渋川堤防が再度決壊、全壊家屋28戸、半壊家屋46戸床上浸水家屋50戸、床下浸水家屋80戸を、多賀村では床上浸水家屋8戸、床下浸水家屋を64戸出す。		井手町史編集委員会 井手町史シリーズ特別編『南山城水害史』 昭和58年
1961年	昭和36年	9月15日～16日		第二室戸台風	府下全域	田辺町関谷地区の被害が甚大。同町など1市6町に災害救助法を発動、被害総額は41億400万円。井手町では全壊75戸、半壊212戸。	上夜久野、降水量114.0㎜	井手町史編集委員会 井手町史シリーズ第三集『「井手町のくらしの歴史」』 昭和54年
1965年	昭和40年	9月17日		台風24・25号	府下各地	相次いで台風が近畿を襲い、府下各地に第二室戸台風に次ぐ被害を出す。井手町では床上浸水家屋6戸、床下浸水家屋44戸、水田冠水72.5ha。		井手町史編集委員会 井手町史シリーズ第三集『「井手町のくらしの歴史」』 昭和54年
1975年	昭和50年	8月6日～7日		水害	南山城地方	井手町では床下浸水家屋15戸、水田冠水40ha。	和束、降水量247.0㎜	井手町史編集委員会 井手町史シリーズ特別編『南山城水害史』 昭和58年
1982年	昭和57年	8月1日～2日		台風10号	府下全域	降雨域は、府下全般にわたり両台風であった。南部では、道路が各所で寸断されるなど、昭和47年9月の台風20号にせまる災害となった。	宇治、降水量36.5㎜(1時間)	井手町史編集委員会 井手町史シリーズ特別編『南山城水害史』 昭和58年

京田辺市水害年表

西暦	和暦	月日	被害地域	被害状況	その他	出典
1573	天正元年	6月	大住三町	堤防決壊		「山村秀雄家過去帳」
1592	文禄元年	8月	大住	堤防決壊		「山村秀雄家過去帳」
1674	延宝2年	8月	高木村 出垣内村 南山村 てかいと村	砂入、10町6反5畝20歩 (此分米149石1斗4升3合) 水押15町3反1畝15歩 (此分米214石4斗1合)		「中村邦治家文書」
1690	元禄3年	8月	志保	破壊延長80間		『田辺町近代誌』
1718	享保3年	6月	浜	破壊延長90間		『田辺町近代誌』
1771	明和8年	7月23日	大住北堤	堤防決壊		「山村秀雄家過去帳」
1802	享和2年	7月1日	大住北浦田	堤防決壊		「山村秀雄家過去帳」
				田地床堀･淵成･砂入等ニ相成、田方五分以下	荒所600石余	「横井忠広家文書」
1814	文化11年		大住三野蒸蔵淵	堤防決壊		「山村秀雄家過去帳」
1815	文化12年	6月	志保	破壊延長30間		『田辺町近代誌』
1868	明治元年	5月15日	生津 天神馬場	出水量約1丈5尺 堤防決壊300間以上 大住村以北の5ヶ町村殆ど人家浸水 生津流出家屋12戸・倒壊18戸 八幡町軒先浸水500戸・床上300戸		『田辺町近代誌』
		10月18日	東 西の口	畑除樋より悪水樋にいたる100間 耕地浸水70町歩余収穫皆無 決壊間約100間		『田辺町近代誌』
1869	明治2年		田辺 西ノ浜	出水量約1丈9尺 浸水90町歩収穫皆無 人家33戸浸水 堤防決壊107間		『田辺町近代誌』
1870	明治3年	9月18日	木津川	洪水		『田辺町近代誌』
	明治3年	9月	宮津	相楽郡狛田地内決壊150間 浸水耕地40町歩		『田辺町近代誌』
1884	明治17年	7月12日	山城	遠藤川尻決壊耕地浸水35町歩		『田辺町近代誌』
1885	明治18年	6月15日	宮津 桐山	堤防決壊30間		『田辺町近代誌』
		7月1日	三山木 薪 大住村	堤防決壊43間耕地浸水40町歩 堤防決壊23間	台風	「中川義和家文書」
1889	明治22年	8月19日	木津川	大洪水		『田辺町近代誌』
1896	明治29年	8月30日	田辺町 志保 三山木・浜 大住村	木津川大住堤内において決壊 増水量6メートル 浸水1ヶ所 30間の欠所 農作物被害計3113円		『田辺町近代誌』 大住村「臨時報告書」
				増水量2丈余り		『京都府綴喜郡　大住村史』
			薪	堤防の一部決壊	台風	『薪誌』
		9月7日	大荒内	堤防決壊40間		『田辺町近代誌』
					『田辺町近代誌』より1日遅い記事	『京都府綴喜郡　大住村史』
		9月11日	田辺町	大住の大荒内堤防決壊50間		『田辺町近代誌』
		10月11日	大荒内	堤防決壊50間		『田辺町近代誌』
1906	明治39年	9月1日	木津川	流域水害		『田辺町近代誌』
1907	明治40年	7月8日	木津川	洪水		『田辺町近代誌』
1913	大正2年	夏	木津川	洪水		『京都府綴喜郡　大住村史』
1915	大正4年	8月5日	川端・志保	延長3間の欠損箇所・浸水被害		『田辺町近代誌』
1916	大正5年			堤防欠損2ヶ所		『田辺町近代誌』
1917	大正6年	10月11日	木津川	堤防決壊		『田辺町近代誌』
1937	昭和10年	6月29日	田辺 河原 薪	耕地浸水、田85町8反余 畑195反 増水188cm		『田辺町近代誌』
1943	昭和18年	7月19日 ～7月20日	木津川	出水		『田辺町近代誌』
1944	昭和19年	10月7日 ～10月8日	木津川	増水		『田辺町近代誌』
1949	昭和24年	7月28日	木津川	増水500cm		『田辺町近代誌』
1950	昭和25年	9月3日	全域	家屋全半壊4015戸 床上浸水1062戸 堤防決壊62	ジェーン台風	『田辺町近代誌』
1951	昭和26年	7月2日	全域	家屋全半壊2戸 床上浸水50戸 堤防決壊21		『田辺町近代誌』
1952	昭和27年	7月10日	全域	床上浸水124戸		『田辺町近代誌』
1953	昭和28年	8月15日	田辺町	罹災者2251人 住宅被害401戸 田畑被害866町 道路決壊177ヶ所 橋梁流出42ヶ所 堤防決壊46ヶ所		『田辺町近代誌』
1954	昭和29年	9月25日	全域	家屋全半壊229戸	洞爺丸台風	『田辺町近代誌』
1959	昭和34年	9月25日 ～26日	全域	家屋全半壊570戸 床上浸水8432戸 堤防決壊863	伊勢湾台風	『田辺町近代誌』

城陽市水害年表

西暦	和暦	月日	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1712年	正徳2年	8月19日	洪水	市辺村領田畑屋敷	奈島村で3ヶ所堤防決壊し、市辺村領田畑屋敷へ水が差し込む		『城陽市史』
		(9月19日)		寺田村	流家137軒 倒壊50軒 死者5・6人		「市辺区有文書」
				東上津屋村野上	堤90間決壊 流家6・7軒 死者4人		
				富野村西放士	堤防決壊		
1716年	享保元年	6月20日 (8月7日)	洪水	東上津屋村の野上	堤152間が切れる		『城陽市史』 「上津屋区有文書」
1728年	享保13年	7月8～9日 (8月13～14日)	洪水	奈島村	堤切 床上浸水7～8尺 潰家19軒		『城陽市史』
				富野村	堤切		
1731年	享保16年		洪水	市辺村	木津川大洪水		「市辺区有文書」
1735年	享保20年	6月 (7月20日～8月17日)	洪水	枇杷庄村	堤切れ		『城陽市史』
1736年	元文元年	8月17日 (9月21日)	洪水	東上津屋村三同寺	木津川堤111間切れ 洪水・家財流出		『城陽市史』 「上津屋区有文書」
1768年	明和5年	7月21日 (9月1日)	洪水	寺田村	石わくで堤切れ 高900石余亡所となる		
1802年	享和2年	6月29日 (7月28日)	洪水	水主村 寺田村 東上津屋村 枇杷庄村 奈島村	堤240間切れ 堤切れ、田地亡所になる 堤防決壊	田地亡所となる	『城陽市史』 「寺田文書」 「枇杷庄区有文書」
				平川村	16軒5～6尺床上浸水 大洪水		「諸営覚帳」
1845年	弘化2年	8月29日 (9月30日)	洪水	東富野屋村	六ヶ池付近の木津川堤27間切れる 20軒余流水 田畑砂入	流水は長池に及	『城陽市史』 『城陽市史年表』 「久世郡誌稿」
1846年	弘化3年	7月7日 (8月28日)	洪水	富野村六ヶ池付近 奈島村 枇杷庄村 水主村 寺田村 東上津屋村 久世村 平川村	木津川堤80間余切れる 堤切れ		『城陽市史』 『城陽市史年表』 「諸営覚帳」
1852年	嘉永5年	7月22日	洪水	富野村領付近	六ヶ池付近の木津川堤約160間切れる	数日床上浸水続く	『城陽市史』 『城陽市史年表』
		(9月5日)			家屋流失・浸水・田畑砂入	収穫総皆無	「富野・大西吉次所蔵文書」
				奈島村	堤切れ	大荒地となる	
1859年	安政6年	8月13日 (9月10日)	洪水	寺田村 久世村 平川村 東上津屋村	寺田村・久世村間の堤226間切れ 田畑床堀・砂入		『城陽市史』 『城陽市史年表』 「明治20年木津川沿岸調」
1876年	明治9年	11月	洪水	八丁荒州地 寺田村 平川村	寺田堤堤防決壊 八町荒州地浸水 木津川春日森堤防45間決壊 寺田村15.0ha・平川村10.0ha浸水 田畑床堀・砂入		『城陽市史』 『城陽市史年表』 『水防五十年史』
1889年	明治22年	6月18日	洪水		木津川富野堤防決壊 54.0ha田地等浸水 巨椋池氾濫 木津川洪水 久世郡村々収穫なし		『城陽市史』 『城陽市史年表』
1917年	大正6年	9月29日	台風	富野荘村 枇杷庄村	木津川増水2丈5尺 西ノ口堤防50間地落 多賀堤決壊		『城陽市史』 『城陽市史年表』 「青谷村誌」
1921年	昭和10年	8月10・11日	集中豪雨	寺田村 青谷村	各河川氾濫 寺田村189戸浸水		『城陽市史』 『城陽市史年表』
1943年	昭和18年	7月1日	洪水		木津川春日森堤防決壊 家屋・田地等浸水		『城陽市史』 『城陽市史年表』
		7月19～20日	洪水	寺田村小字浜代 水主村小字上外島 下外島	木津川出水4.7m、4ha氾濫		『城陽市史』 『城陽市史年表』 「寺田文書」
1949年	昭和24年	7月29日	ヘスター台風	寺田村	木津川増水5m 山川筋堤防決壊 田畑・家屋に被害		『城陽市史』 『城陽市史年表』 「寺田文書」
				富野荘村 青谷村	富野荘村家屋倒壊・浸水 田冠水・畑浸水・堤防決壊・破損8ヶ所		「青谷村誌」
1959年	昭和34年	9月26・27日	伊勢湾台風	—	木津川増水 西富野～水主間堤漏水20ヶ所		『城陽市史』 『城陽市史年表』 「枇杷庄・上田健像氏聞取」 『水防五十年史』
1982年	昭和57年	8月1～4日	台風10号	城陽市内	木津川増水 西富野～上津屋間堤防漏水 湧水13ヶ所 床上下浸水9ヶ所		『城陽市史』 『城陽市史年表』

八幡市水害年表

西暦	和暦	月日	発生時間	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1644	正保元	9月		洪水	岩田村堤			『八幡市誌』
1650	慶安3	9月2日		洪水	岩田村堤			『八幡市誌』
1662	寛文2	6月13日		洪水	生津村堤			『八幡市誌』
1721	享保6	閏7月16日		洪水	岩田村堤	田畑亡所、立毛実入なく、居宅も浸水(下奈良村)		『八幡市誌』
1728	享保13	7月16日		洪水	生津村堤	畑方6分、綿皆無、2分半綿少々(下奈良村)		『八幡市誌』
1735	享保20	6月21日		洪水	岩田村堤			『八幡市誌』
1736	元文元	8月17日		洪水	岩田村堤			『八幡市誌』
1748	延享5	6月5日		洪水	生津村堤			『八幡市誌』
1756	宝暦6	9月16日		洪水	上奈良村常盤道上堤・北堤			『八幡市誌』
1765	明和2	4月17日		洪水	生津村堤			『八幡市誌』
1771	明和8	7月22日		洪水	北堤	生津村溺8人、流家7軒		『八幡市誌』
1802	享和2	6月29日		洪水	北堤美豆ノ出口			『八幡市誌』
1840	天保11	6月23日		洪水	生津堤 大井樋堤	生津堤・大井樋堤先日之損所又々切離、九反田荒地入水		『八幡市誌』
1859	安政6	8月13日		洪水	下津屋村八町申堤北辺			『八幡市誌』
1868	慶応4	5月12～13日		洪水	木津川堤 川口北	生津村流出家屋五〇軒、倒壊五軒。橋本町床下浸水		『八幡市誌』
1890	明治22	8月19～20日		洪水	八幡	木津川堤防決壊		『八幡市誌』
1934	昭和9	9月21日		台風	八幡全域	被災者340名(八幡町)。木造校舎全壊・半壊、児童32名・校長訓導1人死亡、117名負傷(八幡尋常高等小学校)	室戸台風	『八幡市誌』
1952	昭和27	7月1～3日		洪水	八幡	床下浸水24戸、田畑冠水130町歩	木津川からの出水	『八幡市誌』
1953	昭和28	9月25日		台風	八幡全域	水田313町歩の内、302町歩が浸冠水・流失	台風13号	『八幡市誌』

久御山町水害年表

西暦	和暦	月日	発生時間	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1630	寛永7			洪水	島田付近	木津川決壊。		『久御山町の今昔』79頁。
1656	明暦2	8月		洪水	下津屋	木津川堤防決壊。下津屋切れ。		『久御山町の今昔』78頁。
1712	正徳2	8月18日		洪水	伏見、宇治、八幡含む地域	木津川筋の人家大半崩壊。		月堂見聞集　巻1
1721	享保6	閏7月14日～15日	閏7月14日夜	洪水	淀、八幡周辺	淀堤、木津川の堤が決壊。怪我人、牛馬が多く死んだ。		月堂見聞集　巻13
1722	享保7	6月23日		洪水				月堂見聞集　巻14
1723	享保8	8月7日～10日		洪水				月堂見聞集　巻15
1725	享保10	5月13日～20日		洪水				月堂見聞集　巻15
1728	享保13	7月8日、8月13日		洪水				月堂見聞集　巻20
1729	享保14	9月14日、24日		洪水				月堂見聞集　巻22
1733	享保18	8月11日		洪水				月堂見聞集　巻24
1736	元文1	8月16～17日		洪水		木津川堤決壊。藤和田村、田畑に土砂流入。		中西百恵家文書
1787	天明7	8月		洪水		木津川堤が島田で決壊。		中西百恵家文書
1845	弘化2	8月		洪水		木津川筋で北川顔村「極楽門」1ヶ所、島田村「藪」1ヶ所、下津屋村1ヶ所、富之(野)村1ヶ所決壊。		大池神社文書
1868	明治1 (慶応4)	5月12日		洪水	山城盆地全域	巨椋池18尺余増水。木津川右岸島田で破堤(妙蓮寺切れ)。左岸生津決壊(生津切		『久御山町史』第1巻
1889	明治22	8月19、20日	19日午前11時20日正午ごろ	洪水		東堤防は19日御牧村1ヶ所100間余決壊。20日佐山村字市田1ヶ所100間余決壊。淀川は美豆で決壊。		『久御山町史』第2巻
1907	明治40	8月		洪水		従来大洪水といわれる明治18・29・36年と変わらない惨状。木津川水量は上流の城陽市戸富野4.82m、八幡市4.55mを記録。	この水害は特に丹波地方が甚大だったため、久御山町の被害の詳細は報ぜられず。	『久御山町の今昔』78頁。
1934	昭和9	9月		台風		御牧尋常高等小学校全壊、職員・児童1名重症。児童1名軽傷。「御牧村役場事務報告」によると全壊56戸、半壊62戸、大破200余戸。米作約2割の減収、梨無収穫、蔬菜など見積損害価格約32万2000円。佐古尋常		『久御山町史』第2巻432～434頁。 同第3巻798頁。

宇治市水害年表

西暦	和暦	月日	発生時間	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1614	慶長19	6月	—	洪水	六地蔵村	宇治川筋で洪水が発生し、伏見・六地蔵が浸水する。	—	『義演准后日記』
1712	正徳2	8月18日	—	洪水	宇治川筋	大風雨のため宇治川筋に洪水が発生し、小倉堤6ヵ所破堤し、木津川でも堤が切れる。		『徳川実記』『月堂見聞集』
1735	享保20	6月22日	—	洪水	大鳳寺村	蛍橋・善五郎堤・久太郎堤が破損し、田畑が冠水する。	—	『智積院文書』
1736	元文元	8月22日	夜半	洪水	大鳳寺村	夜半から翌朝にかけての大雨のため、大鳳寺村の堤が切れて、田地が冠水する。	—	『智積院文書』
1745	延享2	6月5日	—	洪水	宇治町・槇島村	宇治川筋洪水のため、宇治町・槇島村が浸水する。	幕府の御茶壺蔵が流失する。	『上林味ト家文書』・『上林家前代記録』・『住山時之介家文書』・『興聖寺文書』・『慶弘紀聞』
1756	宝暦6	9月16日	—	洪水	宇治川筋	宇治橋・橘姫社などが流失、浮島十三重石塔が倒壊、興聖寺門前の道路が崩壊、観流亭・望橋亭も流失し、槇島村大曲付近の堤防が切れ	この洪水による田畑の被害が大きいため、宇治郷の年貢率が20%に留められる。	『宇治上神社文書』・『興聖寺文書』・『近衛家文書』・『慶弘紀聞』・『留日記』・『泰平年表』
1757	宝暦7	3月17日	—	洪水	小倉村古堤	宇治川筋の洪水により、古堤が破損する。	同年8月に修復が終える。	『上林家前代記録』
1764	明和元	7月	—	洪水	宇治川筋	宇治川洪水により、橘姫社が流出する。	—	『宇治上神社文書』
1765	明和2	7月3日	—	洪水	槇島村	宇治川洪水により、槇島村興聖寺領田地・藺場が大被害を受ける。	—	『興聖寺文書』・『上林味ト家文書』
		7月5日	前夜	洪水	槇島村	興聖寺門前や上林味ト屋敷が浸水・大破し、槇島村表堤が破堤する。また、大鳳寺村では宇治川・山川筋の大水で田地が冠水し、稲も草も見えない状態となる。	—	『角田博一氏所蔵文書』・『智積院文書』・『上林家前代記録』・『市役所文書』・『上林味ト家文書』・『興聖寺文書』
		7月	—	洪水	宇治町	上林味ト屋敷等流失。橘姫社際堤が破堤する。	—	『市役所文書』
1771	明和8	7月	—	洪水	宇治町	宇治川堤が切れ、宇治橋西詰上林味ト屋敷の門が流失する。	—	『市役所文書』・『上林家前代記録』
1773	安永2	7月11日	—	洪水	宇治地方一帯	宇治川筋始め各河川の堤切れにより、宇治地方一帯の田畑が冠水する。宇治郷西岸の町方でも約90戸が浸水被害を蒙る。桜町・別所町・鷺橋町・橋本町等浸水。民家多数流失。	後に水害防備のため、代官所から西岸低面部の水除築工が下命される。	『片山宗太郎家文書』・『市役所文書』・『興聖寺文書』
1782	天明2	7月23日	—	洪水	宇治川筋	洪水により槇島堤が決壊し、興聖寺の寺地藺場などが浸水する。	—	『興聖寺文書』
1802	享和2	6月29日	—	洪水	宇治川筋	宇治町が浸水し、橋本町上林道庵屋敷等流失。岡屋村の西田堤が数箇所で崩壊する。大鳳寺村でも山川堤が切れ、数町歩の田圃が冠水す	—	『智積院文書』・『片山宗太郎家文書』・『上林味ト家文書』・『上林道庵家文書』・『興聖寺文書』・『三室戸寺文書』
1804	文化元	8月29日	—	洪水	宇治川筋	興聖寺門前の鳳場道筋が破損する。	—	『興聖寺文書』
1807	文化4	5月22日	—	洪水	宇治郷・岡屋村	興聖寺門前の石垣が流失し、宇治郷も浸水被害を受ける。岡屋村も西堤が2ケ所切れ、街道筋が破損す	8月、岡屋村が5月の洪水で損傷した街道筋の修理を近衛家に願い出る。	『興聖寺文書』・『片山宗太郎家文書』
1815	文化12	6月25日	—	洪水	宇治川筋	6月25日から27日にかけて大雨が降り、宇治川筋に洪水が発生する。通円家は床上浸水し、三室・大鳳寺両村の谷川が破堤して森本・丸山付近が冠水する。また、岡屋村でも田地が冠水する。	—	『三室戸寺文書』・『智積院文書』・『片山宗太郎家文書』
1830	文政13	7月18日	—	洪水	大鳳寺村	大鳳寺村で宇治川筋と山川筋の堤が切れ、4町4反5畝の田地が浸水する。	11月には洪水による凶作を理由として、年貢の赦免を願い出る。	『智積院文書』
		7月	—	大風雨	宇治町	上林味ト屋敷が浸水し、大破する。	—	『上林味ト家文書』
1832	天保3	6月	—	洪水	六地蔵村	六地蔵村で洪水が発生し、石橋・石垣などが破壊される。	8月には、被害箇所を修復するため、伏見奉行より銀1貫500匁を借用する。	『清水孝男家文書』
1835	天保6	5月	—	洪水	大鳳寺村	中旬に大鳳寺村で洪水が発生し、田地が浸水する。	8月、智積院が5月の洪水で被害を受けた大鳳寺村に、玄米20石を与える。	『智積院文書』
1836	天保7	7月8日	—	大雨	通円前袋町	大雨により宇治川・木津川が増水し、通円前袋町で溢水する。	淀川筋の通船が欠航する。	『三室戸寺文書』
		8月15日	—	洪水	大久保・小倉・六地蔵	連日の降雨により、大久保・小倉・六地蔵など各所で浸水被害が発生する。また、木津川も増水して、淀大橋付近の堤が切れる。	—	『三室戸寺文書』
1841	天保12	6月5日	—	洪水	大鳳寺村	大鳳寺村で洪水が発生する。	庄屋らが浸水被害のため植付不能で難儀している旨を智積院に申し出る。	『智積院文書』
1846	弘化3	7月7日	—	大風雨	宇治川・大池一帯	宇治川・大池が氾濫して、伊勢田・槇島などの田地が浸水し、池尾村では数戸が倒壊する。また、興聖寺の大松が倒れるなど大きな被害がでる。小倉堤が100間破堤する	—	『教栄寺文書』・『来迎寺文書』・『興聖寺文書』・『明大池尾村文書』
1848	嘉永元	6月5日	—	洪水	宇治橋他	大洪水により宇治橋詰堤が130間に亘り破堤し、桜町・橋本町等で家屋が浸水する。東笠取・西笠取・大鳳寺の各村では、田地の浸水・堤防切れなど大きな被害が出る。	—	『北浦荘一郎家文書』・『智積院文書』・『村上照也家文書』・『続徳川実記』・『上林牛加家文書』
1850	嘉永3	9月3日	—	大風雨	槇島村	大風雨のため、槇島村の堤防が40間に亘って決壊し、同村田地が被害を受ける。	—	『興聖寺文書』
		9月	—	洪水	大鳳寺村	大鳳寺村で度々洪水が発生し、田地が浸水する。	田地が浸水したために凶作となり、年貢の赦免を願い出る。	『智積院文書』
1852	嘉永5	7月22日	—	洪水	宇治郷・槇島村・小倉村	大雨により、宇治川・折居川が氾濫する。また、大池表でも洪水が発生し、宇治郷・槇島村・小倉村の各所が浸水する。	—	『上林牛加家文書』・『北川半兵衛家文書』
1854	嘉永7	7月19日	—	洪水	大鳳寺村	大雨により、大鳳寺で大洪水が発生し、田地が浸水する。	万福寺門前では、饅などが降る。	『智積院文書』・『三室戸寺文書』・『上林牛加家文書』
1855	安政2	8月20日	—	大風雨	大曲付近・岡屋村	大風雨により南山城一帯に大被害が発生し、宇治川では大曲付近の堤や岡屋村西田堤7ヶ所などが決壊し、各所が浸水する。	のちに、被害状況を示す「久世郡絵図」が作成される。	『片山宗太郎家文書』・『興聖寺文書』・『北村友三郎家文書』・『上林牛加家文書』

宇治市水害年表

西暦	和暦	月日	発生時間	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1855	安政2	8月20日	—	大風雨	大曲付近・岡屋村	大風雨により南山城一帯に大被害が発生し、宇治川では大曲付近の堤や岡屋村西田堤7ヶ所などが決壊し、各所が浸水する。	のちに、被害状況を示す「久世郡絵図」が作成される。	『片山宗太郎家文書』・『興聖寺文書』・『北村友三郎家文書』・『上林牛加家文書』
1857	安政4	7月24日	—	大風雨	岡屋村・大鳳寺村	大風雨のため、岡屋村で民家が破損し、大鳳寺村では堤が7ヶ所切れ、田地が浸水する。	—	『片山宗太郎家文書』・『智積院文書』
		8月20日	—	洪水	大鳳寺村	大雨のため、大鳳寺村で堤が3ケ所切れる。	—	『智積院文書』
1865	慶応元	閏5月28日	—	洪水	宇治郷	大風雨のため、宇治郷半白・樋尻・切戸・小桜付近が浸水する。	—	『留日記』
1866	慶応2	6月	—	洪水	宇治郷・小倉村	宇治川・大池で洪水があり、宇治郷・小倉村などで浸水被害が発生する。	—	『留日記』
1868	慶応4	5月12日	—	洪水	宇治郷・槇島村・小倉村	宇治川・大池等で大規模洪水が発生し、槇島堤・籠場堤が決壊する。小倉村では多数の家屋が流失する。	「御釜切れ」と呼ばれる。	『京都府史』・『奥山政一家文書』
1870	明治3	9月	—	洪水	橘姫社	洪水により、宇治橋西詰の橘姫社が流失する。	「六助切れ」と呼ばれる。	『木下利三郎家文書』
1885	明治18	7月2日	—	洪水	巨椋池他	台風により宇治川堤防が決壊し、巨椋池を中心に山城全域が洪水の被害を受ける。	—	『京都日出新聞』
1889	明治22	8月	—	洪水	宇治川筋・巨椋池周辺	3度に亘る台風の襲来で、淀川流域全体が洪水となり、宇治川・巨椋池周辺も大被害を蒙る。	—	『京都日出新聞』
1895	明治28	6月	—	洪水	宇治郡	豪雨により、宇治郡六地蔵以南の全村が浸水する。	—	『京都日出新聞』
1903	明治36	7月9日	—	洪水	淀川流域	梅雨豪雨で淀川流域が改修工事着工以来初の洪水に襲われ、宇治川新築堤防も淀付近で決壊する。	—	『京都日出新聞』
1916	大正5	7月	—	洪水	宇治川筋	宇治川沿岸町村で浸水被害が発生する。	—	『京都日出新聞』
1918	大正7	9月	—	洪水	六地蔵・木幡	降雨による宇治川の増水で、六地蔵・木幡の宅地や田畑が浸水する。	—	『京都日出新聞』
1932	昭和7	7月	—	洪水	宇治川・巨椋池沿岸	7月7日からの豪雨により、宇治川・巨椋池沿岸が浸水する。	—	『大阪朝日新聞』
1953	昭和28	8月14日	夜半	大雨	宇治・久世地方	夜半から南山城地方を豪雨が襲い、宇治・久世地方では隠元橋や家屋2棟が流失し、名木川堤防も決壊す	—	『京都新聞』
		9月25日	—	台風	宇治市内	台風13号の豪雨により、天ヶ瀬橋・喜撰橋など市内の36橋梁が流失し、宇治川が決壊して2,200戸が全半壊・流失・浸水被害に遭う。	10月12日、全家屋が全半壊し、水没する被害に遭った伊勢田遊田地区の代表者が、家屋の放棄と高台への移住を市災害対策本部に陳情する。	『京都新聞』
1965	昭和40	9月17日	—	洪水	六地蔵・木幡他	台風24号で宇治川が逆流し、木幡・六地蔵の民家409戸が浸水する。また、宇治・久世地方で2億3000万円の被害が発生する。	—	『市制30年誌』・『京都新聞』

巨椋池水害年表

西暦	和暦	月日	発生時間	種類	被害地域	被害状況	その他	出典
1747	延享4	8月26日		洪水		大池堤決壊。	東一口、西一口、北川顔の庄屋が連署で切所のみ水留工事の嘆願を伏見川方奉行に差し出す。	『久御山町史』第1巻823～824頁。 同第3巻792頁。
1786	天明6			洪水		中堤決壊。野村「字角田」で長さ27間にわって切れる。		『久御山町史』第1巻824頁。 同第3巻793頁。
1802	享和2	7月		洪水	御牧郷周辺	中堤各所で決壊。東一口村1ヶ所幅18間、相島村「字むかい」幅20間・「字舟付」幅17間半、森村「字すずま」幅25間半・「字角田」幅4間半が2ヶ所、野村2ヶ所幅33間と9間、江ノ口「字苗代」幅15間・「字わんこひ」幅19間・「字東一口村「字新切」幅18間、相島村「字大木ノ下」幅17間4尺5寸、森村「字舟付」幅3間・「字すずま」幅30間・「字角田」幅5間、野村「字三四郎切」30間・森村との境で7間決壊。新道小堤800間にわたって被害。		同上
1807	文化4	5月、9月		洪水	同上			同上
1815	文化12	9月	—	洪水	伊勢田村	巨椋池畔で洪水が発生し、伊勢田村遊田・浮面などで堤が切れ、杭・土俵を用いて水留めを行う。	—	『北川半兵衛家文書』
1845	弘化2	8月		洪水		木津川筋で北川顔村「極楽門」1ヶ所、島田村「藪」1ヶ所、下津屋村1ヶ所、富之(野)村1ヶ所決壊。宇治川筋で中堤が北川顔村持1ヶ所、西一口村持外堤1ヶ所、東一口村持3ヶ所、市田村持7ヶ所、佐古村持1ヶ所が決		同上
1850	嘉永3	7月21日				大風雨により、大池表で洪水が発生する。伊勢田村の田地が浸水する。		『教栄寺文書』・『興聖寺文書』・『北川半兵衛家文書』(『市史』pp.440、6-564.)
1852	嘉永5				宇治郷・槇島村・小倉村	大雨により、宇治川・折居川が氾濫する。また、大池表でも洪水が発生し、宇治郷・槇島村・小倉村の各所が浸水する。	—	『上林牛加家文書』・『北川半兵衛家文書』(『市史』pp. 445.)
1853	嘉永6	5月19日	—	洪水	大池堤	大池堤が2ヶ所で破堤する。	—	『上林牛加家文書』・『北川半兵衛家文書』
1859	安政6	8月		洪水		野村持中堤決壊。「字左治郎切」31間余、「大敵(鼓カ)堂」9間。		『久御山町史』第1巻825頁。 同第3巻793頁。
1866	慶応2	6月	—	洪水	宇治郷・小倉村	宇治川・大池で洪水があり、宇治郷・小倉村などで浸水被害が発生する。	—	『留日記』
1868	明治1(慶応4)	5月12日		洪水		巨椋池18尺余増水。木津川右岸島田で破堤(妙蓮寺切れ)。左岸生津決壊(生津切れ)。	以前より御牧郷13ヵ村、佐山組10ヵ村より嘆願していた木津川川違いに踏切。	『久御山町史』第1巻、825頁。 同第2巻、325頁。 同第3巻、793頁。
1871	明治4			洪水		宇治川左岸槇島付近決壊。溺死体巨椋池まで漂流。六助切れ。		『久御山町の今昔』76頁。
1876	明治9			洪水		木津川寺田堤防決壊。佐山東南部一円の荒砂地はこの時の被害の名残。		同上
1884	明治17	6月17日	午前10時	洪水		巨椋池東堤防の市田村八本松決壊。		『久御山町史』第2巻326頁。
1885	明治18	6月17日～7月2日		洪水		東堤防は東一口村南東部、市田村三本松で決壊。		『久御山町史』第2巻326頁。 同第3巻795頁。
1889	明治22	8月19、20日	19日午前11時20日正午頃	洪水		東堤防は19日御牧村1ヶ所100間余決壊。20日佐山村字市田1ヶ所100間余決壊。淀川は美豆で決壊。		同上
1890	明治23	5月23日		洪水		中堤防決壊。		同上
1896	明治29	9月8日		洪水		東堤防は東一口村東部・西部の2ヶ所決壊。西一口村の民家一戸流失。		『久御山町史』第2巻326～327頁。 同第3巻796頁。
1903	明治36	7月9日		洪水		宇治川付替え新堤防西岸(西一口)決壊。西一口・相島・釘貫・北川顔の民		『久御山町史』第2巻327頁。 同第3巻796頁。
1915	大正4	8月		洪水		巨椋池洪水。		『久御山町の今昔』92頁。
1916	大正5	6月		洪水		巨椋池洪水。		同上
1917	大正6	10月		洪水		巨椋池洪水。		同上
1920	大正10	7月		洪水		巨椋池洪水。		同上
1925	大正14	8月 9月	—	洪水		巨椋池洪水。		『久御山町の今昔』93頁。
1932	昭和7	7月	—	洪水	宇治川・巨椋池沿岸	7月7日からの豪雨により、宇治川・巨椋池沿岸が浸水する。	—	『大阪朝日新聞』
1935	昭和10	6月		洪水		巨椋池洪水。		『久御山町の今昔』94頁。
1938	昭和13	7月 8月7日～10日		洪水		巨椋池洪水。		同上
1951	昭和26	7月15日	—	洪水	巨椋池干拓田	南山城一帯を豪雨が襲い、巨椋池干拓田のほとんどが冠水したため、宇治・久世地方12,000石に及ぶ米の被害が見込まれる。	—	『京都新聞』
1953	昭和28	9月25日	午後9時半頃	洪水		台風13号。宇治川左岸(現伏見区向島大黒町)決壊。巨椋池干拓地周辺2970ha水没。御牧村・佐古村両村被害は負傷者23人、被害家屋1129戸。被害見込総額は御牧村12億9784万6千円、佐古村3億8705万7千円。	巨椋池排水機場が水没。自然排水用の大池樋門が老朽化のため閉鎖。そのために巨椋池干拓地一帯の水を排水できず袋水となる。その後、第1～第4水門を爆破し、水を宇治川に	『久御山町史』第2巻767～774頁。 同第3巻800頁。